



TITLE:

# 中國造園史における初期的風格と 江南庭園遺構

AUTHOR(S):

田中, 淡

---

CITATION:

田中, 淡. 中國造園史における初期的風格と江南庭園遺構. 東方學報  
1990, 62: 125-164

ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66718>

RIGHT:

# 中國造園史における初期的風格と江南庭園遺構

田 中 淡

はじめに……………	一二五頁	初期的造園手法……………	一三八頁
I 庭園の原型と苑囿の傳統……………	一二七頁	一 假山……………	一三八頁
II 初期の自然風景庭園……………	一三〇頁	二 石峯……………	一四四頁
一 秦漢時代の初期私邸庭園……………	一三〇頁	三 苑池……………	一四七頁
二 六朝時代の自然風景庭園……………	一三四頁	四 取景……………	一四九頁
III 明清時代の江南庭園遺構とむすび……………	一五六頁		

## はじめに

中國の造園は悠久の歴史を有し、また實在する庭園遺構は他の文化圏とまったく異質の鮮明な特徴をそなえているところから、造園史という特定領域のみならず、中國文化に關心を抱くおおくの人びとの廣範な興味の対象となってきた。しかし、しばしば中國の文化、思想を説く際に例證として引かれる現存の庭園遺構のほとんどすべてがじつはその傳統の最末期に營造されたものであることについて、あまり注意が拂われることがないようにみえるのは、きわめて奇妙な現象というほかはない。なぜなら、現在、江南地方で實際にみることのできる庭園は、創建年代が宋代にさかのぼるものを含め

て、いずれも所有者がなん度も代わったり、荒廢と擴張が繰り返されていて、明代以前の風格を伝えるものはほとんど皆無に等しいのである。<sup>(1)</sup> わずかに文革で破壊された蘇州の小庭園・藝圃が明代の造營にかかるものらしく、また上海の豫園の一部の築山が萬曆年間の作とみられるなど局部的な遺構は残り、あるいは無錫の寄暢園が實年代はともかく明式の古朴な風格をとどめている、などというような例外はあるにしても、大多數の庭園遺構は實質上、清代末期から民國年間の築造・再建にかかるものにすぎない。一方、計成『園冶』をはじめとする造園論の文獻も大多數は明代末期およびそれ以降に著わされたものであり、現存遺構よりは古いとはいっても、中國造園史のうえではやはり後期段階に屬することは明白である。すなわち、これらの遺構に現れ、あるいは論著にせめられている特徴が中國古來の造園の傳統を代表しているという保證はまったくないといっている。したがって、本來は歴史學の他の分野と同じように、より古い時期の情況については文獻的研究あるいは考古學的研究が、また現存の實例そのものについては遺構の史料批判が、それぞれ求められて當然である。<sup>(2)</sup> もっとも、わたし自身もすでに造園學會誌上に指摘したように、中國造園史の分野は、考古學や美術史、建築史とはちがって、研究それじたいの來歴が淺く、立ち遅れていることは否めない。<sup>(3)</sup> これまで内外から寫真集・圖冊をはじめ、數おおくの單行本や論文が出版されてはいるけれども、これら既往の研究の大半も自ずから明清時代以後の遺構や造園論を中心にあつかったものとなっている。先學諸位が隨意自在の解釋を披瀝されるのは結構なのだが、直感的な言い回しが無批判に縱横していることは否定しえない事實であり、わたしにはそれが斯學の停滯をもたらしている要因のようにおもえてならない。造園史研究が内外を問わず、樣式論的な整備に未熟だといわざるをえないのは、もちろん對象そのものの本原に起因する部分もおおきい。しかし、小稿では、わたし自身いまなお初歩的な研究の段階にすぎないことをじゅうぶん自覺しつつ、敢えて中國庭園の初期的な風格を、從來のような情緒的思索にとどまらず、いくらかでも實質面に迫るために有効な方法論を模索してみたい。

## I 庭園の原型と苑囿の傳統

中國の庭園の歴史を語る場合、皇帝直屬の大規模自然庭園ともいふべき「苑囿」と、官僚・富豪らの私邸に附屬の「私家園林」という兩種の大別がなされるのがつねである。實例でいえば、北京の頤和園や承德の避暑山莊などは前者に、蘇州の拙政園、留園、網師園などは後者に屬する。兩者は所有形態と社會經濟的要因はもとより、規模・形式のうえで決定的な差異があるからであるが、この種の類別は、また中國庭園の濫觴期における原型をさかのぼる際にはとくに有用である。すなわち、中國における庭園の原型といふべきものは、古代の皇帝の所轄になる、畋獵・蒐狩のために設定された廣大な區域を占める苑囿であつた。別稿でものべたように、それは殷代甲骨文にみえる「田」にさかのぼるが、具體的な記述では『詩經』にみえる西周の「靈囿」が最初であつて、『孟子』梁惠王篇では「文王之囿」の規模は「方七十里」と傳えている。この種の囿における畋獵は、『周禮』夏官大司馬や『爾雅』釋天にあげられた四時ごとの狩獵の呼稱のごとく軍事教練と一體化したり、さらには時代が降ると、他の文化圏のロイヤル・ハンティングと同様に遊興の色彩を濃くした<sup>(4)</sup>。こうした殷周時代の苑・囿の場合、實際の經營はたんなる境域設定をともなう程度で、人工的な造園の事蹟に數えられるものではなかつたであらう<sup>(5)</sup>。ただ、この種の帝の苑囿がのちの、普通の意味での造園をともなう最初期の事例に同一の系統として連なっていることも事實であるから、いちおうここに言及しておく必要はある。

皇帝直屬の苑囿として、人工的な造園の明確な事蹟をともなうもっとも早い顯著な實例は、前漢の武帝が秦の舊苑を襲つて新たに開いた上林苑である。『三輔黃圖』に引く『漢舊儀』などによれば、前漢時代の上林苑の規模は方三〇〇里で、苑内に百獸を飼ひ、天子が秋・冬にそこで狩獵をおこなつてその動物を捕獲したといふ<sup>(6)</sup>。上林苑における狩獵については、

周知のように、張衡「西京賦」、司馬相如「上林賦」等の詩賦に詠まれており、壯麗な遊獵が展開されていた様子が知られる。

先秦時代以來の傳統を引いた苑囿と狩獵の結びつきは、その後しだいに形骸化してゆくけれども、儀禮としての狩獵は後世の皇帝直屬の苑囿にまでずっとつきまとう。魏晉南北朝時代の宮苑として代表的なものは、曹魏の明帝がつくった芳林園を受け継ぎ、西晉のときにそれを改稱した洛陽の華林園、および東晉から陳にかけて南朝歷代の帝都建康の宮苑となつた同名の華林園である。西晉洛陽の華林園はその後、北魏のときに復興されている。『洛陽伽藍記』には、つぎのよう

にいう。

翟泉の西に華林園がある。高祖は泉が園の東にあるところから、その名を蒼龍海と改めた。華林園の中には大池があったが、これは漢代の天淵池である。この池の中には「曹魏の」文帝の九華台があった。高祖はこの台の上に清涼殿を築き、世宗は池の中に蓬萊山を築いた。その山の上には僊人館があった。「九華台の」上には釣台殿があった。どれも虹のかたちの閣道（アーチ橋式の空中廊）のつくりで、宙を歩いて往來することができた。三月上巳と季秋巳辰の日になると、帝は龍舟鷁首に乗って、池上を遊覽した。

と。大規模な宮苑における遊興の情況とともに、苑池や天宮樓閣の構成など、いわゆる淨土庭園と共通する要素が隨所に見出される。一方、南朝建康の華林園については、『世說新語』に、東晉中期の簡文帝がそこに遊んだとき、左右の臣下を顧みて、つぎのようにいったと記している。

「氣にいった場所は必ずしも遠いところにあるとはかぎらない。鬱蒼と茂った林や池水は、自ずから濠水や濮水のほ

とりにあるような靜寂な境地をもたらすものだ。きつと鳥獸も魚も自然にやって來て人に親しむようになるものだ」。

ここで、宮苑にあつても山水を主とする造園の傾向がすでに看取されることは注意しておこう。一方、建康の華林園では、

後代の皇帝も嬪妃らを連れて遊宴をおこなっているが、『宋書』（卷四三・徐羨之傳、禮志二）などの斷片的記述からみるかぎりでも、村上嘉實氏も示唆しているように、豪放な狩獵が繰りひろげられた前代の苑囿とくらべると、規模も園内の雰圍氣もはや著しく變化していたであろうと推測される。<sup>(9)</sup> 降って隋の煬帝による造園の事蹟は、歷代皇帝のうちでも出色のものに數えられよう。すなわち、いずれも大業元年（六〇五）につくられたものだが、阜澗の顯仁宮には「海内の奇禽、異獸、草木の類を集めて園内にみたした」という。<sup>(10)</sup> また臨淮に築いた都梁宮は、『太平寰宇記』によると、全周二里の規模にすぎないが、七つの泉からの湧水が一本の流れに集まり、泉上には流杯殿をつくり、淮水の傍らには釣魚台があり、淮水を臨む高い峯には四望殿がつくられ、その側には龍舟を容れることができる川が屈曲して流れ、宮殿が淮水を見下ろしてとりまくように配されていたという。<sup>(11)</sup> さらに、洛陽城外に築かれた西苑は、『大業雜記』によれば、

周長二〇〇里で、苑内に一六の院をつくり、それらが屈曲して龍鱗渠のまわりにめぐらされていた。（中略）。四品の夫人一六人を置いて、ひとつずつの院の主とした。各院の庭内には名花を植え、秋冬には造花を截って代用し、色があせればまた取り換えて新しいのを取りつけた。その池沼の中には、冬季になるとやはり造花で菱や荷の水草をつかった。それぞれの院は西・東・南の三つの門を開き、門はいずれも龍鱗渠に臨んでおり、この渠の幅は二〇步で、上に橋が架かっていた。橋をわたって一〇〇步のところには楊柳や長い竹が植えられ、鬱蒼と生い茂り、名花や美しい草が欄干や階段に隱映していた。（中略）。苑内には築山をつくり、池を鑿った。池は周長一〇里あまり、水深數丈で、池中に蓬萊・方丈・瀛洲の築山をつくり、それぞれの山は三〇〇步ずつ離れ、山の水面からの高さは一〇〇尺あまりもあった。（後略）。<sup>(12)</sup>

という。この時代にいたると、苑囿の類型に屬するものであっても、いずれも庭園の風格としては、すでに古代苑囿の粗放な面貌からほど遠いものとなっていたことがうかがえる。唐代長安城の宮殿北側の禁苑の場合も、しばしば遊獵がおこ

なわれているが、その規模は東西二七里、南北三〇里と、もはや往時の比ではなく、苑内には二四箇所の離宮亭觀があったというから、それぞれが小區劃の庭園を形成していたと考えられ、皇帝直屬の苑圍じたいが、すでに建築を主要な構成要素とする自然風景庭園の風格をそなえていたとみていいだろう。同じく高宗のときに城外東北に營建された大明宮でも、紫宸殿や麟德殿などの宮殿建築群の北側に、發掘報告によると東西五〇〇メートル、南北三二〇メートルほどの太液池を中心とした廣大な庭園の一郭があつて、池中には築山の蓬萊山があり、『舊唐書』によれば、池岸に沿つて、ちようど現存する北京の頤和園と同様なものであらう、四〇〇間の周廊が建てられていた<sup>(14)</sup>。また、玄宗のとき城内東端に増設された離宮の興慶宮には、龍池という大湖があり、その湖畔には亭榭樓閣が建てられていて、綵を結んだ樓船をくりだす遊宴の場となったことが知られる<sup>(15)</sup>。さらに、玄宗と楊貴妃の故事で有名な臨潼驪山の華清宮は、全體が北向きに配され、台や殿が山谷をめぐつて輪のように圓く配置されていたという<sup>(16)</sup>。要するに、斷片的な記載からではあるが、皇帝の苑圍という類型だけをみても、南北朝を経て、おそくとも隋唐時代になると、大規模ななかにも山水自然と建築的要素とを調和させた、いわゆる自然風景庭園の氣風をもつものがすでに主流を占めていたことがうかがえる。この傳統は、さらに北宋の汴梁の金明池、元の大都の太液池、明・清の北京の三海(北・中・南海)、西苑、承徳の避暑山莊などへ着實に受け繼がれてゆくのであるが、それは本論の主要な論題ではないから、省略にしたがうこととする。

## Ⅱ 初期の自然風景庭園

### 一 秦漢時代の初期私邸庭園

すでにみたように、中國庭園の始原は、大規模な自然をそのまま包攝する狩獵儀禮と結びついた苑圍に求められ、また

その傳統のなかで造園の端緒が開かれたことも疑いないところだが、つぎに、より具體的な造園に關連する記述をとおして、初期の造園手法について考えてみたい。まず、文獻のうえで人工的な自然景觀の造營の事蹟として確實にみとめられる最古の記載は、前掲の上林苑よりさかのぼり、秦の始皇帝が咸陽に築いた離宮の蘭池宮がある。すなわち、『史記正義』に引く『三秦記』に、

始皇帝は長安に都をつくった。渭水の水を引いて池をつくり、「池中に」蓬萊山と瀛洲の築山をきずいた。石を彫つて鯨をつくり、その長さは二〇〇丈である。<sup>(17)</sup>

とみえるのがそれである（『長安志』の引用では「細長い池」で、「東西二〇〇里、南北一〇里」であつたとする<sup>(18)</sup>）。ともかく、ここに「水を引きて池を爲る」、「築きて山を爲る」、すなわち、池を掘り、築山をきずくという人工的造園の二大要素が明確にみとめられるのであつて、それと同時に、その築山は池中につくられ、東海の神山を象つたものであつたことを注意しておこう。漢代以降になると、人工的造園の事蹟にかんする記載にはさらに明瞭なものが現れる。前述した前漢武帝の上林苑のうち、建章宮について、『史記』封禪書には、つぎのようである。

そこで建章宮をつくった。その規模は千門萬戸に及び、前殿は未央宮よりも高かつた。（中略）。その北には大きな池を掘つて、「池中に」高さ二〇丈あまりの漸台を設け、この池を太液池と呼んだ。池中には蓬萊・方丈・瀛洲・壺梁の諸島があつて、海中の神山や龜魚に擬えている。<sup>(19)</sup>

と。『漢書』揚雄傳にも關連の記載がある。<sup>(20)</sup>太液池の造園は、これに先行する甘泉宮通天臺、あるいは井幹樓・神明臺や闕・觀などの高層建築と同様に、いうまでもなく武帝の神仙思想の篤信を直截的に反映したものであり、池は東海を、築山の島島は神仙の宿る神山をそのまま具現させたものにほかならない。この種の人工的な山池の造營は苑囿における東海神山の象徴のみならず、漢代には王侯貴族の園苑でもおこなわれたことが知られる。前漢長安に梁孝王劉武が築いた兔園



は、『西京雜記』によれば、

梁孝王は宮室・苑囿をつくるのを樂しみとしていた。曜華之宮をつくり、兔園を築いた。園内に百靈山があり、山には膚寸石、落猿巖、棲龍岫があった。また、鴈池があり、池の間々には鶴洲、鳧渚があった。それらの宮や觀はたがいには連なり、數十里にわたってめぐらされていた。珍奇な果物や樹木、珍鳥や怪獸がことごとく備わっていた。王が毎日、宮人や賓客といっしょに園内で弋射や魚釣りをした。<sup>(21)</sup>

という。名稱からの推測にすぎないが、百靈山という築山には、自然の秘境を象った巖や谷・洞がつくられ、鴈池という苑池には、鶴洲・鳧渚という名の洲濱あるいは畔岸が造成されたものとおもわれる。また、『三輔黃圖』によると、後漢のとき、

茂陵の富民の袁廣漢は、巨萬の錢を藏し、家童は八・九〇〇人もいた。北山に東西四里、南北五里の庭園を築いた。川の流れをさえぎって園内に注ぎ入れ、石を積んで築山をつくり、その高さは十丈あまりで、數里にわたって連なっていた。白い鷗鵲や紫の鴛、犂牛、青い兕を飼ひ、珍しい獸や鳥がその間に蓄えられていた。砂を積んで中洲をつくり、流水を衝きあたらせて波濤をつくりだした。川や海の水鳥を養って繁殖させ、雛が林や池にいっぱいにあふれた。珍しい樹木や草で栽培していないものはなかった。建物はずべてめぐり連なっており、重層の樓閣や長い歩廊は、一日かかっても全部まわりきることはできなかった。<sup>(22)</sup>

という。また後漢の梁冀は、建築・庭園に贅を盡くしたことで知られ、その庭園は、『後漢書』の傳に、

また廣大な園苑を開いた。土を集めて築山をきずき、一〇里の距離に九つの丘があつて、二嶠山（洛寧の山）を象っていた。奥深い山やけわしい溪谷は、あたかも自然そのままのようであつた。飼ひならされた珍しい獸がその間を飛び跳ねていた。<sup>(23)</sup>

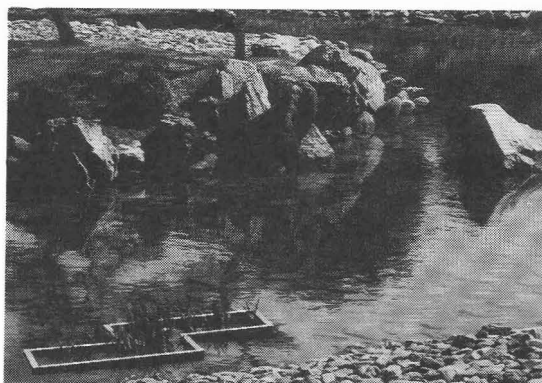


圖1 平城京左京三條二坊六坪（宮跡庭園）の池岸



圖2 平泉毛越寺大泉池の荒磯風の洲濱

ろうかとおもわれる。實例をあげれば、奈良平城京東院庭園や同三條二坊六坪宮跡庭園（圖1）の大きめの庭石を積んだ池中や汀岸の處理、あるいは平泉毛越寺庭園の巨石を立てた荒磯風の洲濱（圖2）、古式の枯山水、遣水（圖3）、觀自在王院の瀧の石組などの遺構である。<sup>(24)</sup> 日本庭園を例證に用いるのは奇異におもえるかもしれないが、現實に中國の庭園には、華清池という特殊な一例を除いて古い時代の發掘例がまったくない。一方、周知のように、平安時代に橘俊綱が著わした造庭秘傳書『作庭記』には、方位の禁忌や巨大な立石などのような中國庭園の濃厚な影響が見出されるからであり、この

とある。これらの最初期の造園の事例には、土や石の築山、池の開鑿、池岸の設營といった中國庭園の基本的な要素が備わっているだけでなく、「沙を積み洲渚を爲り、水を激り波濤を爲り」、「自然の若き有り」、すなわち、自然を模倣し、再現するという、初期における基本原則が見出されることに注目したい。こうした自然風景庭園の記載を読むかぎりでは、現存する清代以降の建立にかかる過飾の庭園よりも、むしろ最近までの發掘調査によって明らかになった日本の奈良・平安時代の庭園遺構の風格のほうに、はるかに接近したものではなかった



圖3 平泉毛越寺庭園遺水（發掘・整備後）における曲水宴（1986年大祭・復元）

ような比較的古い時期の實例を参照するほうが、まだしも中國初期庭園の實像に近づきうるとおもわれるのである。

## 二 六朝時代の自然風景庭園

魏晉から南北朝時代の王侯貴族の私邸庭園には、前節で指摘した人工的自然景觀を主たる構成要素に据えるという傾向がいつそう顯著にみとめられるようになる。

著名な例としては、西晉洛陽の金谷園について、石崇「思歸引序」に、

晩年はいつそう放逸を樂しみ、草深い田舎を好むようになり、かくて河南の別業（金谷園）に隱遁した。その住まいのつくりは、背後は長い堤に據り、前は清らかな疎水に臨み、水の流れが家の下をめぐり、觀や閣の建物、池や沼があつて、魚や鳥をたくさん飼っている。<sup>(26)</sup>

とあるのが、その代表的な例のひとつである。また、山水畫でも聞こえ、老莊思想に傾注した劉宋の戴顒の傳に、

桐廬（浙江建德）は邊鄙の地で、病氣の治療がむづかしいので、そこを出て吳（江蘇蘇州）に住まいを構えた。吳の地方の士人たちはみな家を建てるのに、石を集め、水を引き入れ、樹木を植え、溪谷を切り開く。わずかのうちに樹木が繁茂し、自然そのままの趣がある。<sup>(27)</sup>

といっているのは、當時の造園の趣向をよく物語る例であろう。こうした、いわゆる自然風景庭園へのいつそう明らかな傾斜は、吳世昌氏が指摘したように、私邸庭園そのものの盛行とともに、魏晉風流に特有の山水にたいする愛好から直截的に生まれたものに相違ないだろう。築山と苑池の重視は、後述のように私邸庭園にかぎるものではないが、それと同時

に、この時期になると造園手法の面でもさらに多様な類型が現れる。まず、東晉の文孝王道子の庭園について、『晉書』の傳にこういう。

趙牙は道子のために東第を新築した。築山をきずいて池を穿ち、竹や木を並べて植え、その費用は巨萬にたつした。

……帝がかつてその家に行幸されたとき、道子にいった、「邸宅の中に山があるので、遊んだり眺めることができるのはたいへんよろしいが、ただ修飾があまり度を過ぎており、世間に節儉を示すような代物ではない」と。……帝が歸られたあと、道子は趙牙にいった。「もしも帝がこの築山が版築でつくったものだとならば、おまえはきつと殺されるぞ」<sup>(29)</sup>。

と。私邸庭園としては別格の部類だが、邸内に遊覧のための巨大な築山が構築された例である。また齊の文惠太子長懋の豪邸については、『南齊書』に、

「太子の」宮内の殿堂は、すべて彫刻や装飾が精微で美しいこと、帝の宮殿を凌ぐものがあつた。臺城（宮城）の北側の城壕と同じ位置に、玄圃園を新築した。その中の樓閣や塔には、おおくの奇石を集め、その妙境は山水に盡くされていた。帝の宮殿から見られるのを憂慮して、門の傍らに長い竹を並べ植え、その内側に高い目隠し塀を設け、數百間の游歩牆（遊歩道沿いの塀）をつくつた。いろいろな機巧を設置し、目隠しを施したいときはすぐに立てることができ、もし撤去したいときは、手を動かせばすぐに移動することができた<sup>(30)</sup>。

と。これもむしろ宮苑の類に屬すべき廣大なものであるけれども、奇石の収集とともに山水自然の愛好が明記されている。また、梁の蕭繹が江陵の子城に築いた湘東苑は、『太平御覽』に引く『渚宮故事』に、

湘東王（蕭繹）は子城の中に湘東苑をつくつた。數百丈にわたつて、池を穿ち、築山を構え、蓮や蒲を植えて、岸邊には珍しい木を配植した。その上には通波閣があり、水を跨いで築かれていた。その南には芙蓉堂があつた。……前

に高い築山があり、山には石洞があつて、中を潛り屈曲して行くこと全長二〇〇歩あまりにわたつた。山上には陽雲樓があつて、きわだつて高くそびえ、遠近から望み見ることができた。<sup>(31)</sup>

とある。さらに、前章でもふれた北魏洛陽の華林園の造園工程の任にあたつた茹皓について、『魏書』の傳に、つぎのようについて。

「皓は」築山を天淵池の西側につくつた。北邙山と南山の良質の石を採掘し、汝州（河南臨安）や潁州（安徽阜陽）から竹を移してきて、その間に並べて植えた。樓や館を造營して、上や下に連ねた。草や木を植え、野趣に富んでいた。世宗はここが氣に入られ、折にふれては行幸された。<sup>(32)</sup>

と。同じく北魏洛陽にあつた張倫の庭園は、同城内の私邸庭園のうちでも屈指の豪侈を極めたもので、『洛陽伽藍記』によると、

倫は景陽山をつくり、自然そのままの趣があつた。重なり合つた岩や嶺が高々とそびえて連なり、深い溪や廣い谷がうねうねと續いていた。高い林や大きな木々は日月を蔽い盡くすほどで、垂れ下がつた葛や蘿は風や靄を出し入れできるほどであつた。險しい石の山路は塞がるかとおもうとまた通じ、深い溪谷の路は折れ曲がつたとおもうとまたもとに戻つた。それで自然野趣を好む人士は、ここに遊ぶと歸るのを忘れた。<sup>(33)</sup>

とある。ここにいう景陽山は、既出の宮苑華林園内の景陽山ではなく、張倫がそれを模して自らの宅園につくつたものである。

以上にあげた數例は、庭園としてはいづれも最上級の部類であるが、人工による寫實的な自然景觀の追求は、「多く奇石を聚め、妙は山水に極まる」、「自然の若き有り」、「頗る野致有り」などの表現にいつそう明確にみられ、加えて高樓・池岸・山洞・樹木配植などの新たな造園手法や景物を得ることによって、庭園空間の構成がさらに重層性を増したである。

うことは想像に難くない。こうした築山と苑池、もしくは山峯と清流を重點要素とする自然風景庭園へのいっそう顕著な傾斜の背景には道教的な自然思想の影響があることはいうまでもないが、これと似た山水への確執は、また初期の佛寺の庭園にも見出される。すなわち、『世説新語』に、

康僧淵は豫章において城郭より數里離れたところに精舎を立てた。連なる嶺に寄り沿い、長い川を帶のようにめぐらしていた。花吹く林が回廊や庭に連なり、清流が堂舎に衝きあたっていた。……<sup>(34)</sup>

とみえる。また廬山東林寺について、『高僧傳』に、

(慧)遠は精舎を創設し、山の美を窮め盡くした。背後には香爐の峯を負い、傍らには瀑布の谷間を帶びていた。石によつて基礎を積み、松の木にあわせて家を建てた。清い泉水が基壇のまわりを流れ、白雲が室内に満ちていた。<sup>(35)</sup>

とある。修飾表現とはいへ、佛寺の庭院にも苑池や瀑布の構成要素がみとめられるのは注意すべきであり、これもまた魏晉風流の山水愛好と切り離すことはできない。この種の前面や四周に穿たれた苑池をもつ庭園配置は、また日本でいわゆる淨土庭園や敦煌莫高窟壁畫中の寺院にもみられるが、それらの特色は、高樓や空中廊などの建築的構成とともに、北魏洛陽の佛寺および宮苑といちじるしく近接しており、『洛陽伽藍記』には、景明寺の「青臺・紫閣、浮道相通じ」、瑤光寺では「凌雲」臺の下に碧海・曲池有り。……「宣慈」觀の東に靈芝「池」・釣臺有り、木を累ねて之を爲り、海中に出で、地を去ること二十丈。……凡そ四殿(宣慈觀・宣光殿・嘉福殿・九龍殿)、皆な飛閣有り、靈芝臺に向かいて往來す」というような記載がある。しかも、その淵源は佛教以前にさかのぼり、中國古來の神仙思想につよく影響されたものと考えられる。しかし、この主題はすでに別稿で論じたところであり、ここではこれ以上再論することを避けたい。<sup>(36)</sup>

魏晉南北朝時期にいっそう鮮明化した山水の愛好、自然風景庭園への傾斜は、前章で苑園に關連してふれたように、隋唐時代に受け繼がれていった。しかし、本稿の主眼は、さらに時代を逐つて疎略な概説をつづることではなく、あくまで

も既往の研究とは異なる新たな方法論を試行することにある。すでにみてきた初期の造園にかんする記述のなかにも、いくつか後世の造園手法と共通する要素がみとめられた。そこで、次章では、現存する明清時代以降の遺構あるいは造園論という、時代は降るが、もっと具體性に富む資料を條件つきで視野に据え、そのなかから中國造園史の傳統のうえで初期に屬し得る構成要素、造園手法を抽出、遡及してみたい。というのは、他の領域と同様に、断片的な初期の記載の内容を推測するうえで、末期の遺物や史料が参考となる場合が若干ありそうだし、そしてなによりも、箇箇の造園手法がどの程度まで古くさかのぼりうるものか、初步的な作業として明らかにしておきたいからである。その際、わたしの念頭に、美術史や建築史でいう「様式」——中國語では「風格」(“*Stil*”; “*style*”の譯語)——の概念があることをあらかじめ告白しておくべきだろう。<sup>(37)</sup> わたし自身、それが中國造園史の研究にとって有効に作用し得るのか否か、まったく豫想もつかないが、すくなくとも各人各様の感覺的な敘述に終始するのに比べれば、共通言語の階段を一步でも踏み出す可能性はあるうかとおもうからである。

### Ⅲ 明清時代の江南庭園遺構と初期的造園手法

#### 一 假山

自然風景庭園の形成にとって、もっとも基本的な役割を果たすのが苑池の開鑿と築山の建造であったことは、漢代から六朝時代にかけての事例をみても確認できる。劉敦楨氏が『蘇州古典園林』において、假山(築山)を「土山、土多石少的山、石多土少的山、石山」の四種に分類したのは、多分に機械的ではあるけれども、文獻の記載と實在の遺構の情況からみると、きわめて穩當な方法であったといえる。いま初期の造園事蹟をみると、土山(土の築山)は、前章で最古の例

としてあげた秦の蘭池宮について「築きて蓬、瀛を爲る」(『三秦記』)とあるのが版築もしくは夯土による築造と考えられるのははじめ、前漢の王根宅園について『水經注』に「土山漸臺は西方白虎をかたどる」と、後漢の梁冀の園圍については「土を採りて山を築く。十里に九坂」(『後漢書』前掲)と、『抱朴子』にも「土山を築いて嵩山・衡山になぞらえる」と、文孝王道子の東第も「山は是れ板築の作る所……」(『晉書』前掲)とあり、また齊の呂文度は「廣大な邸宅を新築し、盛んに土山をたてて、珍しい鳥や樹木をすべてその中に集めた。……」(『南史』)などのいっそう明快な記述もある。一般に「山を築く」、「築きて(山を)爲る」などの表現にかかるものは土山がおおかつたとおもわれ、初期における築山の主流であったことは疑いないだろう。

一方、石山(石の築山)は、さきにあげた『西京雜記』に、後漢・梁孝王の兔園のなかの百靈山に「膚寸石、落猿巖、棲龍岫」があつたというのは、すくなくとも一部は石を積んだ築山を用いて溪谷をつくりだしたものであつたとおもわれる<sup>(41)</sup>。もっと明白な例としては、後漢の袁廣漢の「石を構えて山を爲る。高さ十餘丈。數里に連延す」(『三輔黃圖』前掲)が古いが、次節に論ずる石峯の類をべつにすると、純然たる石山というのは、初期の庭園においては一般的ではなかつたと考えられる。前章であげた北魏洛陽の張倫宅園の景陽山について、姜質の「亭山賦」に、「庭に半丘半壑を起ち、目の達し心の想うを聽す。……石を決り泉を通じ、峯を巖前に拔きんで、……山石は高く下く復た危うきこと多し。……」<sup>(42)</sup>とというような表現がみられるのは、石の巖嶺がおおかつたことをうかがわせるが、これもすべてが石山であつたか否かは疑問である。南齊の永元三年(五〇二)に東昏侯寶卷が起こした芳樂苑について、『南齊書』に、「山石はすべて五色に塗り、池水を跨いで紫閣やいろいろな樓・觀を建て、……」<sup>(43)</sup>といっているのは、その悅樂志向の建物と同様に、特異な例といふべきであろう。なお、たとえば時代は降るが、唐の安樂公主が長安に築いた庭園は、『朝野僉載』に、

庶民の莊田を奪い、定昆池をつくり、「その規模は」四九里で、南山に接しており、昆明池に擬えていた。石を積み重





圖4 蘇州耦園・遼谷 黃石の築山

ねて築山をつくり、それで華嶽を象り、流れを引いて、谷川を作り、それで天漢の星を象った。飛閣（空中廊）や步簷（吹放し回廊）、傾斜のある橋や斜路があつて、錦織を被せ、彩色を施し、金銀を飾り、珠玉を輝かせてあつた。また九曲の流盃池（流れが九回屈折した曲水苑池）を穿ち、石の蓮花臺をつくつて、その臺の中から泉水を流出させ、天下の壯麗を極めたものであつた。④

というように、本格的な庭園であつたことが知られ、この場合の「石を累ねて山を爲り、以つて華山を象る」というのは、おそらく石山であつたろう。しかし、概して初期の庭園においては、純然たる石山は盛行しえなかつたとおもわれる。現存する江南地方の庭園の築山をみると、土を一部に用いたものも含めれば、石山のほうが壓倒的に主流を占めており、大部分が土山という實例は蘇州拙政園の中央部など、ごくわずかしかない。一方、すべてが石山という實例は數えきれないほどあり、無錫寄暢園の八音澗の石壁や蘇州耦園の遼谷（圖4）などのように、とくに黃石を用いた築山の場合は、四角ばつた大きな石塊を比較的整然と積み重ねるのが一種の定法となつてゐる。なかには揚州个園のように、石筍・湖石・黃石・宣石の四種の色合いの異なる石山によつて、それぞれ春夏秋冬の四季を表現したものである。これは明らかに築山の建設技術ともかわることであつて、往古はけつしてこのようなものを實現することはできなかったであらう。明の謝肇淛『五雜俎』は、前掲の袁廣漢の「石を構えて山を爲る」を引いて「此れ假山の始め也」としているが、また、吳中の假山は、土石がすっかり備わつていても、新たに名手を雇つてつくるために膨大な工費を要すると記し、さらにつぎのようにいつてゐる。

假山（築山）は山の石を用いなければならない。大小・高低が適切になるように配置し、石を切ったり彫ったりしてはならない。いったい石はその皮層を取り去ると、すぐに干からびて、もはや潤澤には戻らず、苔を生ずる。太湖石、錦川石は缺かすことはできないが、ただ一、二個ぐらいをあしらうのがよい。もし、これらの石だけでつくったら、奇偉なものではできず、畢竟、粉飾が過ぎるように感じられ、丘壑天然の境致を再現することはできない（後略）<sup>(45)</sup>。

これは、いずれもこの當時、假山といえ石山を想定することがすでに當然となっていたことをしめしている。しかし、こうした情況は初期のころとはかなり懸隔があったにちがいない。南宋の周密『癸辛雜識』にいう、

以前の時代には、石を積み重ねて築山をつくった顯著なものはみられない。宣和年間（一一一九—一二二五）の艮嶽のときになって、はじめて大がかりな工事をおこなった。……ところでその工人たちはもっぱら吳興（浙江湖州）から輩出しており、かれらを山匠と呼んでいる。これもあるいはやはり朱勔の遺風であろうか。おそらく吳興は北に洞庭湖がつづいていて、花石を数おおく産出するし、また卞山から産出する種類もひときわすぐれたものであり、それで各地の築山をつくる者がみなこの地方から採取するためだろう。浙右地方の築山でもっとも大きなものといえば、衛清叔の吳中の庭園においてほかにない。一つの山が二〇畝にわたって連續し、そこに四〇棟あまりの亭を配置しているのだから、大きさがわかるうというものだ。ところが、日ごろ見ているうちですぐれて趣のあるものとなると、俞子清侍郎の家の格段と秀逸なのに及ぶものはひとつもない。おそらく子清は、自ら胸中に山水の境地をそなえており、また繪畫も巧みであつたからこそ、創意工夫をすることができたのだろう。峯は大小とりどり一〇〇あまりもあり、高いものは二、三丈にまでたつする<sup>(46)</sup>。……

と。周密がいうように、築山の形態に大きな變化をもたらす契機となつたのは北宋の徽宗のとき、道士の言をいれて國都汴梁の東北に築かれた艮嶽の造營であつたと推定される。その特異な石の運搬法については、かれ自身も記しているが、<sup>(47)</sup>

この工事の技術的經驗をとおして「山匠」と呼ばれる築山の専門職が成立したことは事實であつたろうし、それ以來、築山の工法も本格的な技術をとまなうようになったと推定される。明の黃省曾『吳風錄』に、朱勔の花石綱や艮嶽の築造以來、明代の當時まで吳中の富豪は競って太湖石の奇峯陰洞を築いており、朱勔の子孫は蘇州虎丘の山麓に住んでいて、當時もなお種藝・疊山を業としており、俗に「花園子」と呼ばれていたと記しているのも、やはりそのような情況を伝える史料である。<sup>(48)</sup> また、時代は降るが、清代の著名な造園家の張南垣について、黃宗羲は、『撰杖集』のなかで、つぎのようにいふ。

今（康熙年間）の假山をつくる者は、そそり立つ石を集めて、洞や谷を架けわたし、橋を帶のようにめぐらせ、高い峯をそびえ立たせている。器量の小さい知恵で山嶽や大河を包みこもうとするものだから、そこに入るとまるで鼠穴や蟻塚のようで、せせこましい氣分になる。これは、いづれも繪畫に通じていないからである。しかし、山水をたしなむ人は「氣に入つた場所は必ずしも遠いところにあるとはかぎらない」のであって、「平坦な小丘や險しい土山をつくり、そのうえで石を交え、短い垣をめぐらせ、密に茂つた竹で蔽う」のである。このようにすれば奇峯、絶壁が累累として塀の外からでも人に見える。……まるで大山の麓にいて、溪谷を切り取って、その數塊の石を自分のものにしようとする氣分である。……その土山にたいして、いきなり粗放な石を立て、尋丈ほどの空間に迫ろうとしても、それぞれがばらばらで調和しにくいことがおおい。しかし、そこに突如、數塊の石をあしらうと、全體が躍動し、唱和しているようになる。荊浩の自然、關仝の古淡、元章（米芾）の變化、雲林（倪瓚）の蕭疏もすべて自ずからその境地にとり入れることができるのである。……<sup>(49)</sup>

と。『嘉興縣志』の張南垣傳にも、

古くは高く架け、積み立てるのを名工とし、土を露出するのを好まなかったが、漣（南垣）はこの舊形式を一變させ

た。深く掘って小さい土山を伏せて置き、地形にしたがって配置し、土と石とがほどよく混ざり合って、本物の趣をよく生み出すことができた。<sup>(50)</sup>

とある。すなわち、明清時代でも、時期により築山の風格に相當の差異があり、かれが目指そうとしたのは宋代以前の土山に石を交えた古朴の作風を復することであつたことが知られよう。ちなみに實例をみると、たとえば明末萬曆年間の築造にかかる上海豫園の築山は、ひとつひとつの石の部材が相當大きく、清代中期以降の遺構にみられる太湖石の小部材を繼ぎ合わせたものと比べると歴然たる風格の相違があるが、土はほとんど顯さず、この點では清初の寄暢園や耦園と石質はちがっても共通する。一方、清代乾隆年間の戈裕良は、築山の工法にアーチ構造の原理を採用した造園家であるが、その作品が蘇州環秀山莊に現存している(圖5)。正面からみるとマッシヴな築山だが、その背後に太湖石の連接アーチによ

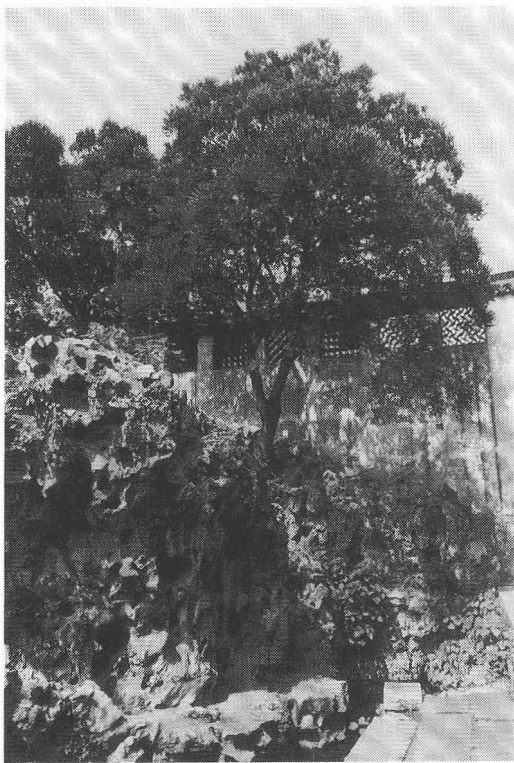


圖5 蘇州環秀山莊 戈裕良の築山

つて築かれた空間が隠されているものであり、これは清代の築山のもっともすぐれた遺構のひとつに數えられていいだろうが、同時にそれは造園史の傳統のなかでは末期に屬するピークとして位置づけられるべきものなのである。

つぎに、山洞についてふれておこう。明清時代の江南地方庭園では、築山の内部の隨所に洞が築かれる例が多い。環秀山莊もその一例であるが、さらに顯著な例として蘇州獅子林には、實際の造營は民國まで降る部分がおおいけれども、膨大な量の太湖石の山洞がある。また



圖6 揚州个園 築山

揚州の庭園には富商特有の遊戲優先の傾向がみられ、たとえば个園や何園のように、黃石と湖石とを問わず、築山の上下に、山洞、溪谷、橋などを立體的に交錯させ、迷路のようにつくったものがある(圖6)。この種の山洞は、初期にあってもいくつかの記載が見出される。庭園關係でおそらく最古のものは、司馬相如の「上林賦」にみえる前漢上林苑の「峻を夷らげ堂を築き、壘臺増成し、巖突に洞房あり」の句で、晉の郭璞の注には「巖突の底に室をつくり、潛行して臺の上に通じているのである

る」とあり、むしろ地下室に似るが、山洞の一種にも數えられよう。<sup>(51)</sup>王延壽「魯靈光殿賦」に、「巖突洞出し、逶迤として詰屈す。周行すること數里、仰いで日を見ず」というのもこれと同様である。<sup>(52)</sup>梁孝王の兔園に「棲龍岫」とみえるものも(『西京雜記』)、文字だけからいえば、山洞であった可能性がある。<sup>(53)</sup>もっとも明確な記載としては、梁の湘東苑の「前に高山有り。山に石洞有り。潛行宛委すること二〇〇餘歩」(前掲『渚宮故事』)があり、ほとんど近世の遺構にちかい構成をおもわせるが、これはむしろ例外といえよう。前に言及した『癸辛雜識』の良嶽にかんする記載に「萬歲山には大きな山洞が數十もあって、その洞内はすべて雄黃石と盧甘石で築かれている。……」<sup>(54)</sup>とみえるが、山洞の盛行もまた石山の普遍化と規を一にし、宋代以後、山匠や花園子という職能の出現を境に急速に變化したものと推定されるのである。

## 二 石 峯

奇石を獨立のオブジェとして構える手法は、明清庭園遺構にほとんど例外なくみられ、江南地方では「立峯」と呼ばれていて、中國庭園の景物のうちでもとくに顯著なものとなっている(圖7)。前節の築山と直接關連することはいうまでも



圖7 蘇州留園 冠雲峯

ないが、兩者は本來べつの系統に屬するものであって、現代中國の造園學でこれを「掇山」（假山の築造）と區別し、「置石」もしくは「特置山石」と稱しているのは妥當なところである。石の築山が初期には普遍的でなかったことは既述のとおりだが、獨立した石峯を置くという例となるときわめてすくない。『南史』に、梁の到溉の邸宅に、書齋の前面の苑池の中に立つ高さ一丈六尺の奇礪石があったのを、帝の囑目に應じて華林園の宴殿の前庭まで移置し、到公石と呼ばれたことが記されている。<sup>(55)</sup>これは、いわゆる奇石の形態をそなえたものであったに相違なく、管見のかぎりでは、單獨の景物としての石峯を明記した文獻上の初見例であろう。奇石、佳石を各地より求めて収集したことは、すでに引いた南齊の文惠太子の玄圃園、北魏洛陽の華林園、その他にもみられるので、佳石趣味そのものは南北朝期にすでに現れていたと考えていい。それは、隋唐時代にいたるといっそう鮮明になる。隋の牛弘の愛石趣味について、白樂天は「太湖石記」に、「石には種類があり、太湖石を集めるのが最高級で、羅浮石、天竺石のたぐいがこれに次ぐ。今公（牛弘）の好みは最高級のもの」と石種を順位として明記し、また大小によって甲乙丙丁の四等級があり、それぞれがさらに上中下の三等級に細分されていたという表現まで用いている。<sup>(56)</sup>それが事實かどうかは措くとして、唐代には、白樂天自身も天竺石や太湖石を収集しており、また李德裕の平泉山居には日觀（泰山）・震澤（太湖）・巫嶺（巫山）・羅浮山・廬山、その他の石が集められていたことが知られる。<sup>(57)</sup>このような趣味収集による石は、「太湖石記」にも、牛弘が「東第南墅に列ねて之を置」いたと記しているように、庭石として鑑賞に供したものに相違なからう。この種の庭石趣味が現存するような石峯の原型をあたえたものにはちがいないが、ただその風格は相當異なり、初期のものはむしろ日本庭園の庭石のような單純なあつかいにすぎなかったのではなからうか。明の謝肇淛『五雜俎』に、築山の石は昔はあまり選り好みせず、北宋の朱勗以降に細かく

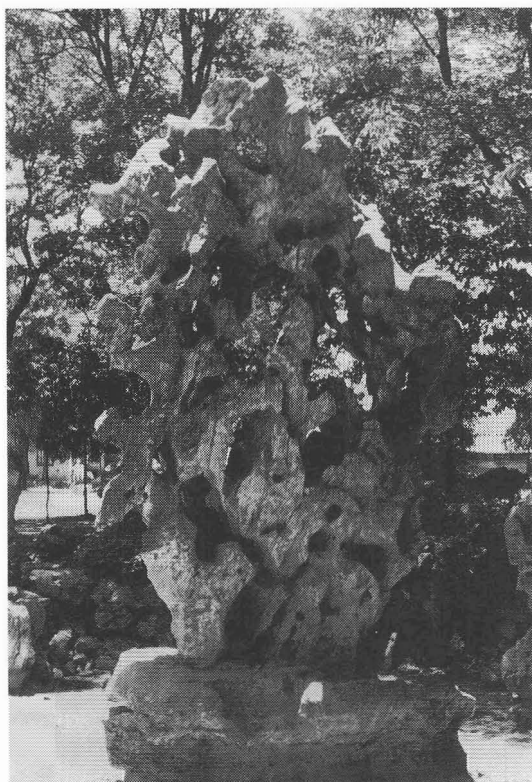


圖9 舊蘇州織造府行宮 瑞雲峯（現蘇州市第十中學）



圖8 『景定建康志』建康府廟  
金華宮二石

いうようになったとするのは、たしかに精確を缺くけれども、後世の遺構の湖石峯におおい垂直に屹立した形態のものに限定するならば、あながち誤りとはいきれないかもしれない。というのは、宋代になると、單獨の石峯とおもわせる記述がおおくみられるからである。すなわち、朱彥の『萍州可談』は、藥洲という庭園に劉鋹が浙江から買い求めた九曜石という名の怪石があったことを記している。王闢之の『澠水燕談錄』は、陳亞の隱居に、そびえ立つ一本の怪石があったといっている。<sup>(61)</sup> また、

周密の『吳興園林記』は、沈徳和尚書園の蓬萊池の南側に高さ各數十丈のそびえ立つ太湖三大石があったと記している。<sup>(62)</sup> これらの「怪石」あるいは「太湖三大石」は、その設定のしかたも石峯の風格も、すでに今日いうところの「特置山石」にかなりちかいものであったと想定されるのである。なお、『景定建康志』には、宋の建康府治にあった錦繡堂の「庭内の左右に金華二石を立てた」と記され、また「府廨」の配置圖のなかには實際に「金華宮二石」が描かれてあって、その形状は、今日みられるようなものにかなりちかい。建物の前面に對をなす石峯を描いた繪畫の表現としては、



南唐の衛賢の「高士圖卷」が古いが、前庭ではないらしく、明確に月臺の部分に石峯を描いているものでは、南宋の劉松年の「四景山水卷」があり、これらの石峯は、いずれも上方が大きく、そびえ立つ形状をもつ點で共通する。ただ、明確に特定しうる實在の建物の構成とともに石峯の實際の設置情況を描いたものとしては、この圖は、おそらくもっとも早い畫像資料に屬するであろう<sup>(63)</sup>（圖8）。

ところで、上海豫園の玉玲瓏など、北宋の花石綱によるものと伝えられるいくつかの太湖石峯や、明代の東園の遺物と伝えられる蘇州留園の冠雲峯などのように、成立年代がかなり古いと目される遺物があり、これらは概して風格奔放の傾向がある。それらのなかでも、現在蘇州市第十中學の校庭内の枯池迹の中に立つ瑞雲峯は、高さ約五メートルもあろうか、とりわけ體量も横擴がりも巨構で孔も大きく、後世の湖石峯を寄せつけない豪放な風格に満ちている（圖9）。この地は、もと清初の順治四年（一六四七）に創立された蘇州織造府の西側の行宮の迹であり、清の顧震濤『吳門表隱』には、瑞雲・紫雲・觀音の三峯はいずれも宋の朱勗が得たもので、のちに董郁陽の所屬に歸し、徐東園に移置され、このうち瑞雲峯は乾隆四四年（一七七九）に織造府西行宮に移されたと記され<sup>(64)</sup>、その來歷についての記載は明の張岱『陶庵夢憶』や清の姜紹書『韻石齋筆談』などにもみえており、これこそ宋代當時の石峯の風格をもっともよく傳えている遺物とみていいだろう。すなわち、今日、中國庭園の代表的景物とされている、高くそびえ立つ形態の石峯は、やはりおよそ宋代ころから定着しはじめた比較的新しい風格であって、しかも現存の石峯のほとんどは宋代の風格からさえ著しく隔たったものであらうとわたしは考える。

### 三 苑 池

既述のように、現在知られる最古の造園の事蹟である秦始皇の咸陽蘭池宮において穿たれた苑池は、東海とそこに浮か



ぶ神仙の住む山を象ったものであった。すでに引いた史料にもみられるように、以來、歷代皇帝の苑囿は、太液池などと呼ばれる苑池を設け、蓬萊・瀛洲・壺梁の東海三山を象った築山を池中につくるのがほとんど定型のようになったらしい。六朝時代の自然風景庭園の場合は、いっそう苑池が重視されており、概して初期の庭園においては、今日みられる江南庭園遺構よりも、全體に占める水面の比率がずっと大きかったと推定される。また、後漢の私邸庭園の場合、汀岸の處理の面でも、水鳥の姿に擬えたり、白砂を鋪きつめるなど、今日みられる庭園とは相當風格を異にしていたのである。しかし、現存例をみると、怡園の池と小さな中島と小橋の構成や、拙政園中央部の巨大な陸部のようなものはあっても、大きな苑池と中島による構成はあまりみられない。しかし、往古は、前掲の康僧淵や慧遠の例のように、初期の佛寺でも建物が清流と接する構成がとられたことが知られるほか、北魏洛陽の佛寺では苑池の重用がひとつの大きな特徴となっており、敦煌壁畫や當麻曼陀羅のように、池を建築の前面に配した伽藍を描く繪畫もある。この主題もすでに別稿で論じたので、重複を避けることにするが、現在する實例は日本の淨土庭園を除くと、明代の建立で、創建は唐代と傳える昆明圓通寺が孤例である。<sup>(68)</sup>しかし、たとえば圓仁が訪れた五臺山の中臺・北臺・西臺はいずれも池の中央に文殊堂のある島をもつ配置であったことが知られるし、この種の形式の伽藍は往時はかなり實在していたとみていいとおもわれる。こうした苑池の構成は、古代の神仙思想に源を發しており、池中の中島は、本來は海中の神山であったものが、時代が降るにつれて、しだいに變質し、ついにはたんなる小島として定型化するにいたったのであろう。清流、水池の重視は、宮苑や佛寺のみならず、初期の庭園には顯著であった。すなわち、白樂天は「池上篇」のなかで、

敷地は方一七畝で、建物が三分の一、水面が五分の一、竹が九分の一を占めていて、島には橋道を設けてその間を結んだ。<sup>(70)</sup>

と明記しており、庭内には三つの島があつて、西平橋と中高橋、つまり水平橋とアーチ橋で連絡していたとものべている。<sup>(71)</sup>

また、峯腋寺に面して建てた草堂は、その「草堂記」によると、

前面に平地があり、その周長は一〇丈で、中央に平らかな臺があつて、平地の半分を占め、臺の南には方形の池があつて、平臺の二倍を占めていた。池の周囲には山や竹や野草がたくさんあり、池の中には白い蓮を植え、白い魚を養っていた。またその南には石の溪谷があり、谷間をはさんで古い松や古い杉があつて、その大きさは一〇人でやっと抱えられるほどで、高さは何百尺になるかわからない。

という。いずれも水面の占める比重の大きさを明確に伝える。この傾向は宋代になつても依然として一部にみられ、たとえば『吳興園林記』にみえる沈寶王尙書園は、「園内に五つの池を穿ち、三方がすべて水面で、野趣に富んでいた」という。要するに、こうした苑池と中島による初期庭園の構成は、むしろ日本の浄土庭園などに残影をとどめている反面、現存する明清時代の江南私邸庭園の場合は、敷地面積の制約もあるうが、その傳統的構成からは遠く隔たったものとなっているといえよう。

#### 四 取 景

最後に、すこし觀點を變えて、取景、あるいは空間的表現のための手法を二、三とりあげてみたい。

既述のように、初期の自然風景庭園が築山と苑池を主要な要素とした「自然の若き」景觀の再現を目標としていた以上、築山の建造などに際しては、自ずから實在の山嶽の景觀が模倣されたにちがいない。そのなかでも、たとえば後漢の梁冀の園囿が「土を採り山を築く。十里に九坂。以て二嶠を像る」（『後漢書』前掲）というように、最初期からすでに、特定の名山——この場合は河南洛寧の山——を模してつくられている例があるのは注目に値しよう。ちなみに、こうした名勝の模寫という造園手法は、『作庭記』にも明記されているように、日本庭園にも早くからとり入れられ、江戸時代の回

遊式庭園にいたるまで廣範に見受けられる。ただ、それらが、極端にいうと巨大な箱庭の如き景觀を呈する場合がすくなくないのにたいして、江南庭園遺構ではかえって初期的な名勝模倣という景物がほとんどみられなくなっているのは、後者においては、山峯や溪谷、海岸などの形狀が、實在の景觀そのままの機械的な縮景だけでは實現されなくなったからにほかならない。この點について明記した比較的早い文章としては、白樂天の「太湖石記」に、

要約していえば、三山も五嶽も、百洞も千壑も、ごく小さくいっしょに縮影されて、すべてその中にあるのである。百仞も一擧のうちに、千里も一瞬のうちに、いながらにして得ることができ<sup>(74)</sup>る。

とある。この考えかたは、中國の山水畫に特有な遠近表現の手法とすこぶる深い關係にあることはいうまでもない。山水畫と築山の關係を直接、引き合いに出しながら、さらに具體的にのべた記述が、北宋の沈括の『夢溪筆談』にみえる。すなわち、

いったい山水畫の手法は、大きなものを小さく見せることであって、ちょうど人が築山を見るのと同様なものである。もし、本物の山の場合と同じように、下から上を望めば、「前面の」一重の山が見えるだけで、どうして重なり合う嶺をすべて見ることできようか。しかも、溪谷の中の様子は見えるはずが<sup>(75)</sup>ない。

と。これは、山水畫論でいう三遠——すなわち、北宋の郭熙『林泉高致』に集成された高遠・深遠・平遠の三つの異なる視點（仰觀・俯瞰・遠望）による構圖の理論と呼應している。<sup>(76)</sup>よりいっそう庭園に即していえば、縮景・借景・框景・景深（層次）などの、空間的表現のための中國固有の造園手法こそ、この構圖理論と直截的に連關するものにほかならない。あるいは、降って清の沈復の『浮生六記』がもっと総合的にのべるように、庭園とは、大の中に小を見、小の中に大を見るもので、虚と實とを對比し、あるいは藏れ、あるいは露われ、あるいは深く、あるいは浅くなるようにするのが肝要であり、敷地が廣くて石がおおいことは重要ではない——というのも、これと同様な思考にもとづいている。<sup>(77)</sup>中國庭園にお

ける縮景の概念は、たしかに沈括が指摘したように、山水畫論と同工であり、靜觀と動觀——日本流に言えば觀賞式庭園と廻遊式庭園——とを問わず、取景の地點ごとに——繪畫であれば場面ごとに——景物の視點を變えることによってはじめて成立するものであった。いいかえれば、初期的な、つまりもっと單純な縮景の手法のほうは、皮肉にも日本近世庭園の巨大箱庭風縮景においてむしろ素朴なかたちで受け繼がれているのである。これにたいして、中國造園史の傳統における後期の遺構では、前者にとって代わる獨自の空間表現方法として縮景がすでに定着していることがみとめられるのである。その一方では、唐三彩による山峯や、老樹の一部、あるいは小塊の奇石などを用いて、小宇宙を具象的に表現しようとした盆景——すなわち庭園のミニチュア——という特殊な場合において、かえって初期的な縮景の原型が傳えられているということができらるであらう。

また、縮景とも當然ながら關連する取景の手法として、いわゆる借景がある。これについて明記した早い例としては、宋の李格非の『洛陽名園記』にいう、

環谿。……華亭は、南面が池に臨んでいた。池は左右兩翼をひろげたかたちで、北にすすんで涼榭をとおり過ぎると、そこで水が再び集まって大きな池となる。……〔涼〕榭の南には多景樓があり、そこから南を臨むと、嵩嶽の少室山、龍門の大谷があり、層をなした緑の嶺嶺がことごとく眼前にその姿をあらわしていた。〔涼〕榭の北には風月臺があり、そこから北を望むと、隋唐の宮殿・樓閣の千萬もの門や扉が、高くそびえ、輝いており、一〇里あまりにわたって連なっていた。いったい左思が一〇年あまりを費やし、力を盡くして賦に詠んだものを一瞥のうちに見わたすことができた。<sup>(78)</sup>

と。一方、明末の造園理論書、計成の『園冶』は、とくに「借景」の章を設けており、そこでつぎのようにいっている。借景は、庭園にとってもっとも肝要なものである。遠借、隣借、仰借、俯借というように、場合に應じて景を借りる



圖10 蘇州拙政園中央部の借景（小滄浪から小飛虹を通して荷風四面亭を望む）



圖11 蘇州拙政園中央部の借景（鳥瞰圖）

のである。<sup>⑨</sup>

ここにいう「遠借」（遠景の借景）、「隣借」（近接する景物の借景）、「仰借」（高所の景觀の借景）、「俯借」（低地の景物の借景）という四種の借景の手法は、既述の山水畫の三遠の構圖理論ときわめて近接し、對應していることに気づくであろう。いま引いた宋の洛陽環谿の場合は、日本庭園におおい名山の借景と同様に、いずれも「遠借」の部類に屬するものである。現存する江南庭園遺構のうちでは、たとえば拙政園中央部の小滄浪から小飛虹という廊橋をとおして荷風四面亭や見山樓を臨む借景（圖10・11）、あるいは倒影樓から曲橋をとおして宜兩亭を借りる取景などは、いずれも園内の建物などを「隣借」する例であり、この種の近接の景物による借景の手法は、いちいち實例をあげないけれども、このほかにも數

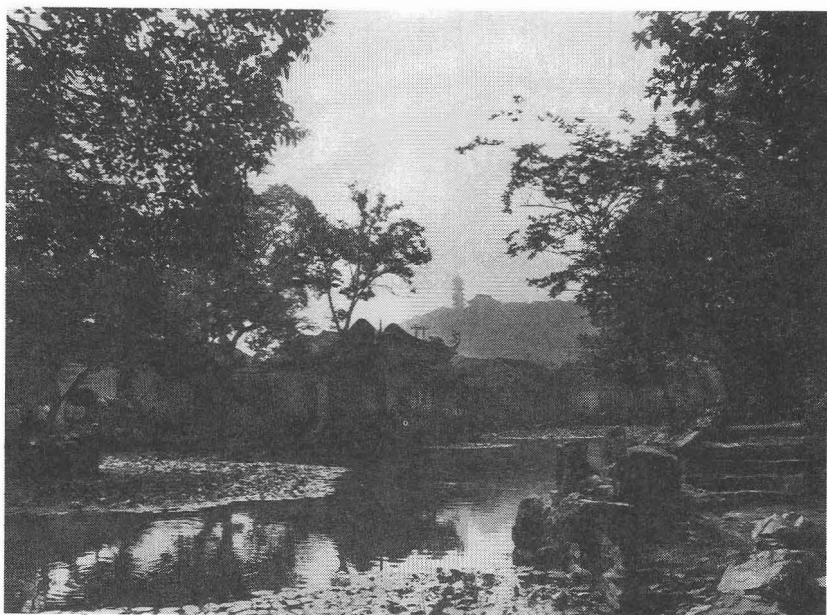


圖12 無錫寄暢園の借景（錫山・龍光塔を遠借）

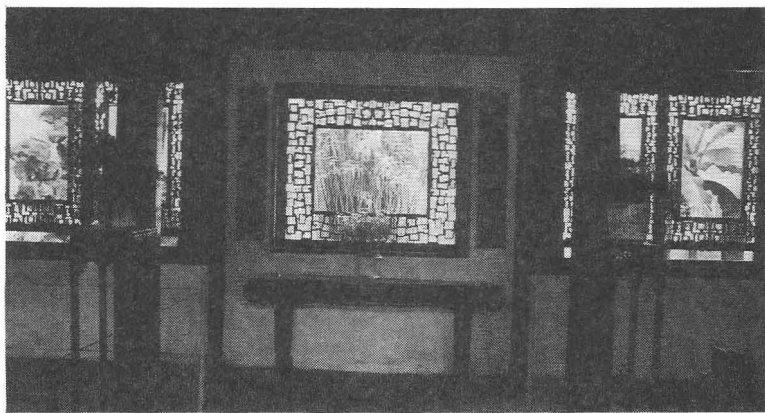


圖13 蘇州網師園殿春簾 框景

おおく見出すことができる。一方、遠借は、拙政園繡綺亭から北寺塔を臨み、留園舒嘯亭から西園寺を借りるなど、一部の高地點にかぎれば若干の例がみられるものの、あまり顯著ではない。このうち、無錫寄暢園の苑池から遙か遠く山頂に龍光塔がそびえ立つ錫山を遠借しているのは明代建設當時の立地條件を踏襲したものとみられ、むしろ古朴な借景の手法

を傳えた好例といえよう（圖12）。概して、造園手法としての借景は、江南庭園遺構においては素朴もしくは初期的とみられる遠借よりも、園内景物による隣借の多分に技巧的な傾向がつよく、その變質の背景には、縮景と同様に、山水畫の構圖理論がつよく影響しているようにおもわれる。このほか、借景の一種で、中國造園に特有の手法として、「框景」がある。たとえば、網師園殿春簾の背面に、石峯や梅・芭蕉・竹などをそれぞ

れ點景として、額縁の中の畫のように切り取るものである（圖13）。これも逐一實例をあげることは省くが、ほかにもしばしば見出される。框景という語そのものは現代中國造園學の用語だが、『園冶』の掇山の章の峭壁山の項にも、

峭壁というのは、壁によりかかるように築山をつくるものである。白壁を畫紙とみなし、石を繪とするのである。つくる場合は石の皺紋にしたがって築き、古人の畫法にならって、黃山の松や栢、古梅、美しい竹を植える。これを圓窗に收めれば、ちょうど鏡の中に遊ぶようである。<sup>(80)</sup>

とある。また、清初的李漁『閒情偶寄』は、借景を論じた條において、「窗を開くに景を借るより妙なるはなし」といい、湖舫の周圍の壁面をすべて板壁でふさいで、その中央にだけ便面（扇形窗）の開孔部を設けておけば、中に座っていると、兩岸の湖や山の景色、寺觀、塔などから、行き交う人や馬にいたるまでを、ことごとく便面の中に取り入れて、わが天然の圖畫をつくるのだ——とのべ、さらには、壁面に實際に軸襖装を貼りつけて、その本紙にあたる部分を開放の窗につくれば、窗は窗ではなく畫であり、山は屋後の山ではなく畫上の山である——と、いっそう詳細かつ明確にその手法を説明している。<sup>(81)</sup>すなわち、框景は、おそくとも明代にはすでに意識的に採用された手法の一種であったことが知られる。如何せん造園そのものに即した記載でこれと同定し得る例を知らないもので、想像にすぎないけれども、軸装・額装繪畫の室内での觀賞による影響は否めず、それに加えてなканずく奇石立峯や石筍の觀賞が普遍化したところに生まれた手法ではなからうかとおもわれる。

つぎに、現代中國造園學では「層次」——畫論から借りた用法であらう——と稱する、一種の錯覺を利用した空間・奥行表現の方法についてみてみたい。たとえば蘇州鶴園では、東側の塀沿いに屈曲した步廊が半亭をあいだに置きながら連續してつくられているが、これは限られた敷地の空間を、奥行が深いように感じさせるために意圖的に採用された構成である（圖14 a・b）。ほかに、拙政園西部の波形廊や、網師園竹外一枝軒の一郭、留園石林小院、南京瞻園の園門など、江南

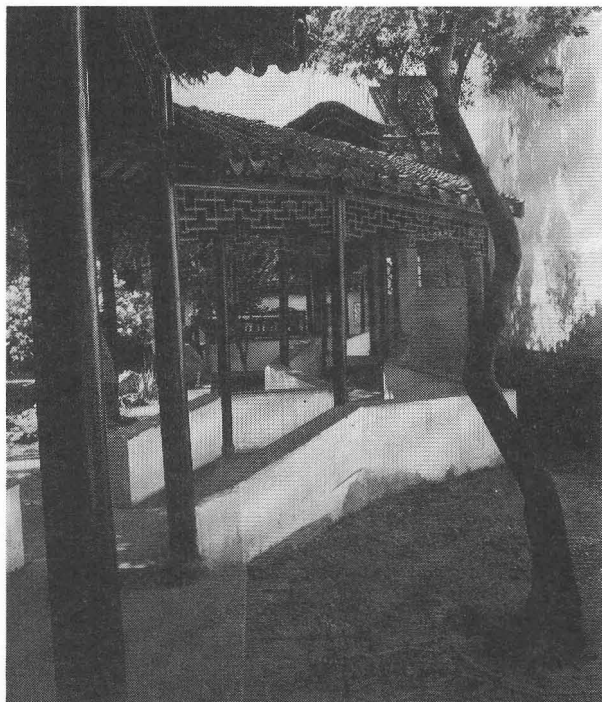


圖14 a 蘇州鶴園 景深（層次）

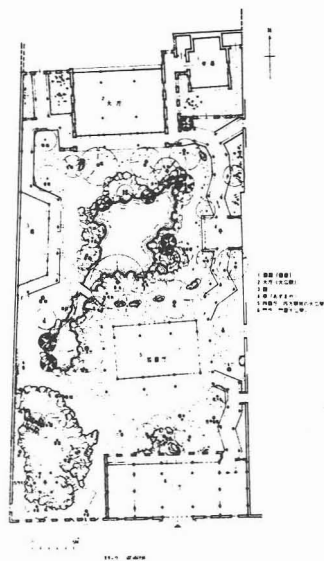


圖14 b 蘇州鶴園 平面圖

庭園遺構では、このようにアプローチをわざと屈曲させて、空間距離を実際よりも深く遠くおもわせるといふ手法がしばしば見出される。『紅樓夢』に、賈政が寶玉をつれて大觀園に行ったとき、

そこで門を開かせて中に入ったが、一帶の綠色の山が眼前を遮った。食客たちはそろって「いい山だなあ」とほめた。賈政はいった、「この山がなかったら、門を入るとすぐに園中の景色が全部いっぺんに目に入ってしまう。それではなんの風情ありません」と<sup>(82)</sup>とあるのは、日本の銀閣寺塀と同様、やはり敢えてアプローチを屈曲させている例である。明の文震亨『長物志』に、すべて門に入るところは、必ずすこし屈曲させ、まっすぐすぎるのを忌む。<sup>(83)</sup>

といい、また『園冶』にも、門からの途徑は彎曲させるといつているのは、<sup>(84)</sup>いづれも同様であり、いわゆる「一覽無餘」を忌み嫌う考えによるものである。さきに例示した戈裕良の環秀山莊のアーチ構造を用いた築山は、前引の『園冶』にいう「峭壁山」の實例に相當するもので、石の築山



は隣地との境の塀に向かって伸びているため、実際にはそこまで止まっているにもかかわらず、塀の裏側まで續いてるように感じられる(圖5)。これもまた、既述の「小中見大」、「以小觀大」に相當する、一種の錯覺を利用した空間表現の手法にはかならない。初期の造園において、この種の手法について直接言及した表現こそ見出されないけれども、南齊の文惠太子の玄圃園の「游步牆數百閒を造り」(『南齊書』前掲)とか、蜿蜒と連なる山徑などの記載はみられる。もとより山峯、大海を園内に再現することは、山水畫が「咫尺の内に萬里の遙を瞻る」のと同じく、もっとも初源的な空間造形に直結するところであり、江南庭園にみられる景深もしくは層次の造園手法は、曲廊・半亭などの細部はべつにして、初期からの傳統を傳えたものというべきであろう。

以上にのべた個別の造園手法以外にも、「鋪地」と呼ばれる地面のモザイク・タイル狀の化粧鋪裝の手法の初期の例や、あるいはほとんど植物にのみ仰いだ庭園の早い例、花木の配植などの問題もあるが、紙幅の關係で省略にしたがうことにする。

### むすび

江南庭園遺構にみられる種々の構成要素や造園手法には、比較的新しい傳統に屬するものがおおいといわざるを得ず、そうした風格を中國庭園の古來不變の特徴のようにみることは、おおきな錯誤を招くであろう。中國造園史からみた初期の風格には、むしろ早く佚われて今日に傳わらない要素がすくなくみとめられる。たとえば、中島と橋をそなえた苑池を中心とする配置構成、白砂鋪きの汀岸處理、土を主とする築山、點景としての自然素朴な庭石、遠借を主とする借景の手法、名勝の景觀の模倣などはいずれもその部類に屬する。これらのなかには、かつて日本に傳えられ、もちろん變質を遂げたとはいえ、日本古代庭園の發掘遺構においてむしろ比較的よく往古の姿を偲ばせる構成要素も見出される。一方、

空間表現の方法として、たとえば人爲的な屈曲による奥行の強調のように、曲廊などの具體的細部はともかくとして、原則そのものは初期庭園以來の傳統を受け継いでいるとみられる要素もある。中國庭園の初期的な風格と江南庭園遺構のそれとの顯著な懸隔をみると、とくに石だけの築山や太湖石などの奇石峯に代表されるように、宋代ころを前後にして、かなりおおきな風格の變化があつたのではないかと推測される。石の築山と奇石峯は、現存する中國庭園にあつてももつとも象徴的な景物であるから、その風格があたえる印象の差異は、想像以上のものがあつたであらうとおもわれる。もちろん、初期的風格が變質してゆく過程については、名園探訪記や各園の創立記がいくつか残る宋代以降、元代、明代初・中期の箇箇の事例について、さらに詳細に検討する必要があることはいうまでもない。しかし、中國庭園の初期的風格、および江南庭園遺構をみるうえでの先入觀にたいして、いくぶんなりとも修正を加えることができたとすれば、小稿の所期の目的はいちおう果たせたといえる。

#### 注

- (1) 有名な實例を二、三あげれば、蘇州の滄浪亭は、北宋の慶歷四年（一〇四四）、蘇舜欽の創建にかかるが、その後、南宋時代に擴張され、明代には荒廢、清代にもふたび荒廢し、のち清末の同治十二年（一八七三）に再建されたものを解放後に修復したのが現状であり、康熙三十五年（一六九六）版『滄浪小志』に刻まれた圖とのあいだにさへ懸隔がある。同じく蘇州の獅子林は、元代末期の至正二年（一三四二）、僧惟則の門徒が宋代の廢園を佛寺に改めたのに創まるが、その後、明代の嘉靖年間（一五二一—一五六六）に富豪の私邸庭園となり、明代萬曆年間、清代乾隆年間に修復を受け、さらに民國七十五年（一九一八—一九二六）に改修されたのが現状であり、明初に倪雲林が描いた「獅子林圖」の情況とはほとんど異質である。
- (2) 建築史・造園史の専門家には不要なことであるが、一般的理解のため

に注記を加えておく。從來、建築史學の分野では、現存遺構について、解體修理などの機會に、構成部材の痕跡の調査などによって建立當初の形式に復元する方法が、とくに日本ではすでに確立しており、中國でもまだきわめて不十分ながら同様な方向を採用する事例が出現しつつある。文獻學における史料批判と同様に、こうした作業もしくは觀察——修理の機會の有無はべつにして——は必要不可欠である。庭園の場合、建築のように痕跡調査が容易ではないためあつて、内外を問わず、この種の方法論は未だ確立されていないが、すくなくとも同様な觀點に立つた觀察が求められてしかるべきであらうと考える。身近な例をあげれば、蘇州網師園の北側の回廊や拙政園東部の八角亭は、解放後にいわゆる老師傳の設計によって新築されたものである。史料批判に厳しい歴史・文學・哲學などの先達諸氏がこゝ庭園にかんするかぎり無造作に近代の遺構をそのまま例證とされることがおおいのは、

ほとんど信じがたいことである。

- (3) 田中淡『中國造園史研究の現状と問題點』『造園雜誌』五一卷三號、一九八八。

ここでは圖集・寫真集・單行本のうちで、とくに重要なものを以下にいくつかあげておく。くわしくは上記拙稿に附載の「中國造園史關係文獻目錄」を参照されたい。

童嵩『江南園林志』、中國工業出版社、一九六三(第二版、中國建築工業出版社、一九八四)。

劉敦楨『蘇州古典園林』、中國建築工業出版社、一九八〇(田中淡譯『中國の名庭—蘇州古典園林—』、小學館、一九八二)。

陳從周『蘇州園林』、同濟大學建築系、一九五六。

杉村勇造『中國の庭』、求龍堂、一九六六。

Maggie Keswick, *The Chinese Garden*, London, 1978.

劉策『中國古代苑囿』、寧夏人民出版社、一九七九。

陳從周『園林談叢』、上海文化出版社、一九八〇。

陳從周『說園』、書目文獻出版社、一九八三。

Edwin T. Morris, *The Gardens of China—History, Art, and Meanings*, New York, 1983.

陳從周『揚州園林』、上海科學技術出版社、一九八三。

中國科學院自然科學史研究所主編『中國古代建築技術史』、科學出版社、一九八四。

張家驥『中國造園史』、黑龍江人民出版社、一九八六。

Pierre and Susanne Rambach, *Gardens of Longevity in China and Japan—The Art of the Stone Raisers*, New York, 1987.

- (4) 田中淡『古代中國の狩獵——捕獲動物の種類と狩獵方法の類型——』(小山修三編『日本民族文化の源流比較シンポジウムⅦ狩りと漁撈』「假題」所收、日本放送出版協會、近刊)。

- (5) 曹汎氏は、『論語』子罕の「子曰。譬如爲山。未成一簣。止。吾止也。

譬如平地。雖覆一簣。進。吾往也」の一句を中國の人工疊山の最古の例とするが、防衛あるいは補強の施設としてはともかく、造園との直接的關連の點では賛同しかねる。

曹汎『略論我國古代園林疊山藝術的發展演變』『建築歷史與理論』第一輯、江蘇人民出版社、一九八一。

- (6) 『三輔黃圖』卷四「漢上林苑。即秦之舊苑也。漢書云。武帝建元三年開上林苑。(中略)。周袤三百里。離宮七十所。皆容千乘萬騎。(中略)。

漢舊儀云。上林苑。方三百里。苑中養百獸。天子秋冬射獵取之。

- (7) 『洛陽伽藍記』卷一。城內「泉西有華林園。高祖以泉在園東。因名爲」

蒼龍海。華林園中有大海。即漢(魏)天淵池。池中猶有文帝九華僊。高祖於臺上造清涼殿。世宗在海內作蓬萊山。山上有僊人館。上有釣臺殿。並作虹蜺閣。乘虛來往。至於三月朔日。季秋巳辰。皇帝駕龍舟鷁首。遊於其上。

首。遊於其上。

- (8) 『世說新語』言語「簡文入華林園。顧謂左右曰。會心處不必在遠。翳然

林水。便自有濠濮閒想也。覺鳥獸禽魚。自來親人。

- (9) 村上嘉實「六朝の庭園」『古代學』四卷一號、一九五五。

- (10) 『隋書』煬帝紀上「(大業元年三月)又於早濶營顯仁宮。採海內奇禽異獸草木之類。以實園苑」。

- (11) 『太平寰宇記』卷一六・河南道一六・泗州・臨淮縣「都梁宮。周迴二里。在縣西南一十六里。隋大業元年。煬帝立名。(中略)。又有七眼泉。湧

合爲一流。于東泉上作流盃殿。又於宮西南淮側造釣魚臺。臨淮高峰。別造四望殿。其側有曲河。以安龍舟大舸。枕向淮渭(渭)繫帶宮殿。

(後略)。

- (12) 『大業雜記』「元年夏五月。築西苑。周二百里。其內造十六院。屈曲

周繞龍鱗渠。(中略)。置四品夫人十六人。各主一院。庭植名花。秋冬即剪雜彩爲之。色淪則改著新者。其池沼之內。多月亦剪綵爲菱荷。每

院開東南西南三門。門並臨龍鱗渠。渠面闊二十步。上跨飛橋。過橋百步。即「種」楊柳脩竹。四面鬱茂。名花美草。隱映軒陛。(中略)。苑內造

山爲海。周十餘里。水深數丈。其中有方丈、蓬萊、瀛洲諸山。相去各三百步。山高出水百餘尺。(後略)。

- (13) 『舊唐書』地理志一「禁苑。在皇城之北。苑城東西二十七里。南北三十里。東至灊水。西連故長安城。南連京城。北枕渭水。苑內離宮、亭、觀二十四所」。

- (14) 『舊唐書』憲宗本紀下「(元和十二年五月)己酉。作蓬萊池周廊四百間。中國科學院考古研究所編著『唐長安大明宮』四八—四九ページ、科學出版社、一九五九。

- (15) 『舊唐書』玄宗本紀上「(玄宗)大足元年。從幸西京。賜宅於興慶坊。(中略)。上所居宅外有水池。浸溢頃餘。望氣者以爲龍氣。(景龍)四年四月。中宗幸其第。因遊其池。結綵爲樓船。令巨象踏之」。また、『冊府元龜』卷一四・帝王部・都邑一、「長安志」卷九・興慶坊。この文と少しく異なる。

- (16) 宋敏求『長安志』卷一五・縣五・臨潼「貞觀十八年。詔左屯衛大將軍姜行本、將作少匠閻立德營建宮殿。御賜名溫泉宮。(中略)。天寶六載。改爲華清宮。驪山上下益治。湯井爲池。臺殿環列山谷。明皇歲幸焉。(中略)。華清宮北向。(後略)」。

- (17) 『史記』秦始皇本紀「(三十一年十二月)始皇爲微行咸陽。與武士四人俱。夜出逢盜澗池」。張守節『史記正義』「括地志云。蘭池陂。即古之蘭池。在咸陽縣界。秦記云。始皇都長安。引渭水爲池。築爲蓬、瀛。刻石爲鰐。長二百丈」。

- (18) 『長安志』卷三・宮室一・秦・蘭池宮「三秦記曰。始皇引渭水爲長池。東西一百里。南北一十里。築爲蓬萊山。刻石爲鰐魚。長一百丈」。

- (19) 『史記』封禪書「於是作建章宮。度爲千門萬戶。前殿度高未央。(中略)。其北治大池。漸臺高二十餘丈。命曰太液池。中有蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁。象海中神山龜魚之屬」。

- (20) 『漢書』卷八七・揚雄傳「武帝開上林。(中略)。周袤數百里。穿昆明池。象滇河。營建章、鳳闕、神明、駁娑、漸臺、泰液。象海水周流方丈、

瀛洲、蓬萊。游觀多靡。窮妙極麗」。

- (21) 『西京雜記』卷一「梁孝王好營宮室苑囿之樂。作曜華之宮。築兔園。園中有百靈山。山有膚寸石、落猿巖、棲龍岫。又有鴈池。池間有鶴洲、覺渚。其諸宮觀相連。延亘數十里。奇果異樹。瑰禽怪獸畢備。王日與宮人賓客弋釣其中」。

- (22) 『三輔黃圖』卷四「茂陵富民袁廣漢。藏鏹鉅萬。家僮八九百人。於北「邨」山下築園。東西四里。南北五里。激流水注其中。構石爲山。高十餘丈。連延數里。養白鸛鵒、紫鴛鴦、鵲牛、青兕。奇獸珍禽。委積其間。積沙爲洲渚。激水爲波濤。致江鴈海鶴孕雛產鰕。延漫林池。奇樹異草。靡不培植。屋皆徘徊連屬。重閣脩廊。行之移晷不能偏也」。

- (23) 『後漢書』列傳二四・梁冀傳「冀乃大起第舍。(中略)。又廣開園囿。採土築山。十里九坂。以像二嶠。深林絕澗。有若自然。奇禽馴獸。飛走其間。(後略)」。

- (24) 『平城京左京三條二坊六坪發掘調査報告』、奈良國立文化財研究所、一九八六。

- 森蘊『日本庭園史話』、日本放送出版協會、一九八一。

- 森蘊『作庭記』の世界』、日本放送出版協會、一九八六。

- 荒木伸介・角田文衛・埴原和郎・大矢邦宣『奥州平泉の世紀』、新潮社、一九八七。

- (25) 略希哲『唐華清宮』(公開講演會發掘された東アジア古代苑池「所收」、奈良縣立橿原考古學研究所・由良大和古代文化研究協會、一九八八。

- (26) 石崇「思歸引序」(『文選』卷四五)「晚節更樂放逸。篤好林藪。遂肥遁於河南別業。其制宅也却阻長堤。前臨清渠。百木幾於萬株。流水周於舍下。有觀閑池沼。多養魚鳥」。

- (27) 『宋書』卷九三・戴顒傳「桐廬僻遠。難以養疾。乃出居吳下。吳下土人共爲築室。聚石引水。植林開澗。少時繁密。有若自然。(後略)」。

- (28) 吳世昌『魏晉風流與私家園林』『學文月刊』一卷一期、一九三四。

- (29) 『晉書』卷六四・簡文三子傳「(會稽文孝王)道子以(趙)牙爲魏郡太守。

(中略)。牙爲道子開東第。築山穿池。列樹竹木。功用鉅萬。(中略)。帝嘗幸其宅。謂道子曰。府內有山。因得遊獵。甚善也。然修飾太過。非示天下以儉。(中略)。帝還宮。道子謂牙曰。上若知山是板築所作。爾必死矣。(後略)。

- (30) 『南齊書』卷二一・文惠太子傳「(太子)宮內殿堂。皆雕飾精綺。過於上宮。開拓玄圃園。與臺城北墅等。其中樓觀塔宇。多聚奇石。妙極山水。應上官望見。乃傍門列脩竹。內施高郭。造游牆數百間。施諸機巧。宜須郭蔽。須臾成立。若應毀撤。應手遷徙」。

- (31) 『太平御覽』卷一九六引『洛宮故事』「湘東王於子城中造湘東苑。穿池(池)構山。長數百丈。植蓮蒲。緣岸雜以奇木。其上有通波閣。跨水爲之。南有芙蓉堂。(中略)。前有高山。山有石洞。潛行宛委二百餘步。山上有陽雲樓。極高峻。遠近皆見。(後略)」。

- (32) 『魏書』卷九三・茹皓傳「遷驃騎將軍。領華林諸作。皓性微工巧。多所興立。爲山於天淵池西。採掘北邙及南山佳石。徙竹汝頰。羅峙其間。經構樓館。列於上下。樹草栽木。頗有野致。世宗心悅之。以時臨幸」。

- (33) 『洛陽伽藍記』卷一・城東「(張)倫造景陽山。有若自然。其中重巖複嶺。嵌峯相屬。深蹊洞壑。遞遞連接。高林巨樹。足使日月蔽虧。懸葛垂蘿。能令風煙出入。崎嶇石路。似壅而通。崢嶸澗道。盤紆復直。是以山情野興之士。遊以忘歸」。

- (34) 『世說新語』棲逸「康僧淵在豫章。去郭數十里。立精舍。旁連嶺。帶長川。芳林列於軒庭。清流激於堂宇。(後略)」。

- (35) 『高僧傳』卷六・慧遠傳「遠創造精舍。洞壺山美。却負香爐之峯。傍帶瀑布之壑。仍石壘基。卽松栽構。清泉環階。白雲滿室」。
- (36) 田中淡「中國建築・庭園と鳳凰堂——天宮樓閣、神仙の苑池——」(『平等院大觀・第一卷・建築』所收)、岩波書店、一九八八。
- (37) ハンリヒ・ヴェルフリン著、守屋謙二譯「美術史の基礎概念」、岩波書店、一九三五。
- アロイス・リーグル著、長廣敏雄譯「美術樣式論」、岩崎美術社、一九

七〇。

- (38) 『水經注』卷一九・渭水「前漢之末。王氏五侯大治池宅。引它(都)水入長安城。故百姓歌之曰。(中略)。土山漸臺。像西白虎。即是水也」。
- (39) 『抱朴子』外篇・崇教「盈溢之過。日增月甚。其談宮殿。(中略)。起土山以準嵩霍。決渠水以象九河」。

- (40) 『南史』卷七七・茹法亮傳「(法亮)文度既見委用。大納財賄。廣開宅宇。盛起土山。奇禽怪樹。皆聚其中。後房羅綺。王侯不能及」。

- (41) 曹汎氏は、『西京雜記』および『三輔黃圖』のこの庭園にかんする記載を唐寧王の九曲池の中の景物で、唐人が梁孝王に借りて唐寧王を指責したものであり、また兎園は河南にあって、三輔にはなく、まして西京にはなかったとするが、この説には賛同しない(前掲論文、注5)。

- (42) 姜質「亭山賦」(『全後魏文』卷五四)「卜居動靜之閑。不以山水爲忘。庭起半丘半壑。聽以目達心想。(中略)。爾乃決石通泉。拔嶺巖前。(中略)。若乃絕嶺懸坡。踰蹊蹉跎。泉水紆徐如浪嶠。山石高下復危多」。

- (43) 『南齊書』卷七・東昏侯本紀「(永元)三年夏。於閼武堂起芳樂苑。山石皆塗以五采。跨池水立紫閣諸樓觀。壁上畫男女私褻之像。種好樹美竹。天時盛暑。未及經日。便就萎枯。(後略)」。

- (44) 『朝野僉載』卷三「安樂公主改爲悖逆庶人。奪百姓莊園(田)。造定昆池。四十九里。直抵南山。擬昆明池。累石爲山。以象華岳。引水爲澗。以象天津。飛閣步簷。斜橋磴道。衣以錦繡。畫以丹青。飾以金銀。瑩以珠玉。又爲九曲流盃池。作石蓮花臺。泉於臺中浦(流)出。窮天下之壯麗」。

- (45) 謝肇淛「五雜俎」卷三「假山須用山石。大小高下。隨宜布置。不可斧鑿。蓋石去其皮。便枯槁。不復潤澤。生蕓苔也。太湖錦川。雖不可無。但可粧點一二耳。若純是。難得奇品。終覺粉飾太勝。無復丘壑天然之致矣。余每見人園池。踞名山之勝。必壅蔽以亭榭。粧砌以文石。繚繞以曲房。堆疊以尖峰。(中略)。吳中假山。土石畢具之。外倩一妙手作

之。及昇築之費。非千金不可。然在作者工拙何如。工者事事有致景。不重疊石。不反背疎密。得宜高下合作。人工之中。不失天然。偏側之地。又含野意。(後略)。

- (46) 周密『癸辛雜識』前集·假山「前世疊石爲山。未見顯著者。至宣和。艮岳始興大役。(中略)。然工人特出於吳興。謂之山匠。或亦朱勔之遺風。蓋吳興北連洞庭。多產花石。而卞山所出類亦奇秀。故四方之爲山者。皆於此中取之。浙右假山最大者。莫如衛清叔吳中之園。一山連亘二十畝。位置四十餘亭。其大可知矣。然余平生所見秀拔有趣者。皆莫如俞子清侍郎家爲奇絕。蓋子清胸中自有邱壑。又善畫。故能出心匠之巧。峯之大小凡百餘。高者至二三丈。(後略)」。

- (47) 周密『癸辛雜識』前集·艮岳「艮岳之取石也。其大而穿透者。致遠必有損折之慮。近聞汴京父老云。其法乃先以膠泥實填衆竅。其外復以麻筋。雜泥固濟之。令圓混日曬。極堅實。始用大木爲車。致於舟中。直俟抵京。然後浸之水中。旋去泥土。則省人力。而無他慮。此法奇甚。前所未聞也」。

- (48) 黃省曾『吳風錄』「自朱勔創以花石媚進。建節鉞而太湖石一座。得銀盈千役夫。賜郎官金帶石。封爲磐固侯。壘爲艮嶽。至今吳中富豪競以湖石築時奇峰陰洞。至諸貴占據名島。以鑿鑿而嵌空妙絕。珍花異木。錯映闌闔。雖閭閻下戶。亦飾小小盆島爲玩。以此務爲饕餮。積金以充衆欲。而朱勔子孫居虎邱之麓。尙以種藝壘山爲業。游於王侯之門。俗呼爲花園子。其貧者歲時擔花。鬻於吳城。而桑麻之事衰矣」。

- (49) 黃宗羲『撰杖集』張南垣傳「今之爲假山者。聚危石。架洞壑。帶以飛梁。矗以高峯。據盆盎之智。以籠岳瀆。使入之者如鼠穴蟻垤。氣象蹙促。此皆不通於畫之故也。且人之好山水者。其會心正不在遠。於是爲平岡小坂。陵阜陂陀。然後錯之石。綴以短垣。繫以密篠。若是乎奇峯絕嶂。累累乎牆外。而人或見之也。其石脈之所奔注。伏而起。突而怒。犬牙錯互決林。莽犯軒楹而不去。若似乎處大山之麓。截溪斷谷。私此數石者爲吾有也。(中略)。當其土山。初立頑石。方驅尋丈之間。多見

- (50) 其落落難合。而忽然以數石點綴。則全體飛動。若相唱和。荊浩之自然關同之古淡。元章之變化。雲林之蕭疏。皆可身入其中也。(後略)」。

- (51) 『康熙嘉興縣志』卷七下·藝術「張漣。字南垣。少學畫得山水趣。因以其意築園壘石。(中略)。舊以高架壘綴爲工。不喜見土。漣一變舊模。穿深覆崗。因形布置。土石相間。頗得真趣」。

- (52) 司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)「夷峻峩堂。累臺增成。巖突洞房」。注「郭璞曰。言於巖突底爲室。潛通臺上也」。なお、突は一に突、また突に作る。突であれば、『楚辭』招魂「多有突夏。夏室寒些」、王逸・章句「突、複室也。夏、大屋也。(中略)。言隆棟凍寒。則有大屋複突溫室。盛夏暑熱。則有洞達陰堂。其內寒涼也」と同種のものである。この解釋には議論があるが、いまは略す。高步瀛『文選李注義疏』第四冊、一七七九—一八〇ページ、中華書局、一九八五、を参照。王延壽『魯靈光殿賦』(『文選』卷一)「巖突洞出。逶迤詰屈。周行數里。仰不見日」。

- (53) 『說文』九下(段校)「岫、山有穴也」。段玉裁注「有穴之山謂之岫。非山穴謂之岫也。東京賦。王鮪岫居。薛解云。山有穴曰岫。然則岫居言居有穴之山」。

- (54) 周密『癸辛雜識』前集·艮岳(承前・注47)「又云。萬歲山大洞數十。其洞中皆築以雄黃及盧甘石。(後略)」。

- (55) 『南史』卷二五·到溉傳「溉第居近淮水。齋前山池有奇礪石。長一丈六尺。帝戲與賭之。并禮記一部。溉並輸焉。(中略)。石即迎置華林園宴殿前。移石之日。都下傾城縱觀。所謂到公石也」。

- (56) 白居易『太湖石記』(『白居易集』卷四三)「古之達人。皆有所嗜。(中略)。今丞相奇章公嗜石。(中略)。游息之時。與石爲伍。石有族。聚太湖爲甲。羅浮、天竺之徒次焉。今公之所嗜者甲也。(中略)。石有大小。其數四等。以甲乙丙丁品之。每品有上中下。各刻於石陰。曰。牛氏石甲之上、丙之中、乙之下。噫。是石也。千百載後。散在天壤之內。轉徙隱見。誰復知之。(後略)」。

- (57) 白居易「池上篇」(『舊唐書』卷一六六・白居易傳)「樂天罷杭州刺史。得天竺石一、華亭鶴二以歸。始作西平橋。開環池路。罷蘇州刺史時。得太湖石五、白蓮、折腰菱、青板舫以歸。又作中高橋。通三島逕」。
- (58) 李德裕「平泉山居草木記」(『復有日觀、震澤、巫嶺、羅浮、桂水、巖湍、廬阜、漏澤之石在焉』。なお、上文中の石種の同定については、陳植・張公弛選注『中國歷代名園記選注』二二—二三ページ、安徽科學技術出版社、一九八三、を参照。
- 同「平泉山居戒子孫記」(「始立班生之廬。漸成應叟之宅。又得江南珍木奇石。列于庭除。平生素懷于此足矣。漸成應叟之宅。又得江南珍木奇石。列于庭除。平生素懷于此足矣。」)
- (59) 謝肇淛「五雜俎」卷三「西京雜記載茂陵富人袁廣漢築園四百里。(中略)。此假山之始也。然石初不甚擇。至宋宣和時朱勔童貫以花石。娛人主意。如靈璧一石。高至二十餘丈。周圍稱是。千夫昇之不動。(後略)」。
- (60) 朱或「萍洲可談」卷二「劉鋹好治宮室。欲購怪石。乃令國中以石贖罪。富人犯法者。航海於二瀾。買石輸之。今城西故苑藥洲有九石。皆高數丈。號九曜石」。
- (61) 王闢之「澠水燕談錄」雜錄「陳亞少卿。(中略)。晚年退居。有華亭雙鶴唳。怪石一株尤奇峭。與異花數十本。列植於所居」。
- (62) 周密「吳興園林記」南沈尚書園「沈德和尚書園。依南城。近百餘畝。果樹甚多。林檎尤盛。內有聚芝堂、藏書堂。前鑿大池幾十畝。中有小山。謂之蓬萊池。南暨太湖三大石。各高數丈。秀潤奇峭。有名於時。其後賈師憲欲得之。募力夫數百人。以大木構大架。懸巨絙組城。而出載以連舫。涉溪絕江。致之越第。凡值數夫。其後賈敗官。斥賣其家諸物。獨此石臥泥沙中。適王子才好之。請買于官。募工移植。其費不貲。未幾有指爲盜賣者。省府追逮。半歲所費十倍於石。遂復昇還之。可謂石妖矣」。
- このほか、陸游『老學菴筆記』卷五に、「成都石筍。其狀與筍不類。乃累疊數石成之」と記されるのも、その實際の形狀は、現存する石筍の類よりは石峯に屬するものであったことをしめしている。
- (63) 『景定建康志』卷二四「錦繡堂。在玉麟堂之左。(中略)。庭中左右植金華二石」。
- (64) 「織造經制記」碑(順治四年十二月、織造府舊址、陳有明「重修織染局記」(順治四年、蘇州織造府志)卷三)、陳有明「建總織局記」(順治四年、同上)、「蘇州織造局圖題記」碑(順治四年二月、蘇州博物館、蘇州歷史博物館・江蘇師範學院歷史系・南京大學明清史研究室合編『明清蘇州工商碑刻集』、四一九ページ、江蘇人民出版社、一九八一。顧震壽『吳門表隱』卷一「瑞雲、紫雲、觀音三峯。玲瓏高聳。宋朱勔所得。後歸邵陽董氏。移置東園徐氏。瑞雲峯。乾隆四十四年移之織造府西行宮內。紫雲峯久失。觀音峯今屹立半邊街踏坊外」。
- (65) 張岱「陶庵夢憶」卷二「花石綱遺石」(「越中無佳石。董文簡齋中一石。磊塊正骨。窟窿數孔。疏爽明易。不作靈譎波詭。朱勔花石綱所遺。陸放翁家物也。文簡暨之庭除。石後種別牙松一株。辟咄負劍。與石意相得。文簡軒其北。名獨石軒。石之軒獨之無異也。石實先生讀書其中。勒銘志之。大江以南。花石綱遺石。以吳門徐清之家一石爲石祖。石高丈五。朱勔移舟中。石盤沉太湖底。覓不得。遂不果行。後歸烏程董氏。載至中流。船復覆。董氏破資募善入水者取之。先得其盤。詔異之。又休水取石。石亦旋起。時人比之延津劍焉。後數十年。遂爲徐氏有。再傳至清之。以三百金暨之。石連底高二丈許。變幻百出。無可名狀。(後略)」。
- 姜紹書「韻石齋筆談」卷上・瑞雲峯「震澤洞庭之麓。產奇石焉。宣和中。朱勔得神運峯于福山。廣百圍。高六仞。殫東南民力。運入汴京。爲良岳羣峯之長。今姑蘇徐氏園之瑞雲峯。亦其流亞也。峯巒秀拔。巖崑嵌空。蒼潤嶙峋。聳立林表。初在王文恪別墅。後歸太僕徐君。徐營菟裘于吳門。移置此石。(後略)」。
- (66) 田中淡・前掲論文(注36)。
- (67) 田中淡「昆明圓通寺の碑文と建築・池苑」『佛教藝術』一五一號、一九

八三。

(69) 圓仁『入唐求法巡禮行記』卷三「(開成五年五月廿日)到中臺。(中略)。

到臺頂。々上近南有三鐵塔。竝無層級相輪等也。其體。一似覆鍾。周圍四抱許。中間一塔四角。高一丈許。在兩邊者圓圓。竝高八尺許。(中略)。鐵塔北邊有四間堂。置文殊師利及佛像。從此北一里半。是臺頂中心。有玉花池。四方各四丈許。名爲龍池。池中心小嶋上有小堂。置文殊像。時人呼之龍堂。池水清澄。深三尺來。在岸透見底砂。淨潔竝无塵草。臺頂平坦。周圍可百町餘。超然而孤起。(中略)。然中臺者。四臺中心也。遍臺水湧地上。(中略)。到西臺頂。々々平坦。周圍十町許。臺牀南北狹。東西闊。東西相望。東狹西闊。臺頂中心。亦有龍池。四方各可五丈許。池之中心有四間龍堂。置文殊像。於池東南有則天鐵塔一基。圓形無級。高五尺許。周二丈許。(中略)。於中臺地上水湧。潛停於草下。窪處水停。(中略)。到北臺。々頂周圍六町許。臺體圓圓。臺頂南頭有龍堂。々內有池。其水深黑。滿堂澄潭。分其一堂爲三隔。中間是龍王宮。臨池水上置龍王像。池上造橋。過至龍王座前。此乃五臺。五百毒龍之王。每臺各有一百毒龍。皆以此龍王爲君主。此龍王及民。被文殊降伏。歸依不敢行惡云々。龍宮左右。隔板牆。置文殊像。於龍堂前有供養院」。

(70) 白居易「池上篇」(即白氏叟樂天退老之地。地方十七畝。屋室三之一。水五之一。竹九之一。而島樹橋道間之)。

(71) 白居易「池上篇」(前掲・注57)。

(72) 白居易「草堂記」(『白居易集』卷四三)「是居也。前有平地。輪廣十丈。中有平臺。半平地。臺南有方池。倍平臺。環池多山竹野卉。池中生白蓮、白魚。又南抵石澗。夾澗有古松、老杉。大僅十人圍。高不知幾百尺」。

(73) 周密『吳興園林記』北沈尚書園「沈賓王尚書園。正依城北奉勝門外城。(中略)。園中鑿五池。三面皆水。極有野意」。

(74) 白居易「太湖石記」(撮要而言。則三山五岳。百洞千壑。飄緲簇縮。

中國造園史における初期の風格と江南庭園遺構

盡在其中。百仞一舉。千里一瞬。坐而得之」。

(75) 沈括『夢溪筆談』卷一七・書畫「大都山水之法。蓋以大觀小。如人觀假山耳。若同眞山之法。以下望上。只合見一重山。豈可重重悉見。衆不應見其谿谷閑事」。

(76) 孫籛祥「中國山水畫論中有關園林布局理論的探討」『園藝學報』三卷一期、一九六四。

(77) 沈復『浮生六記』卷二・閑情記趣「若夫園亭樓閣。套室回廊。疊石成山。栽花取勢。又在大中見小。小中見大。虛中有實。實中有虛。或藏或露。或淺或深。不僅在周回曲折四字。又不在地廣石多。徒煩工費。或掘地堆土成山。閒以塊石。雜以花草。簾用梅編。牆以藤引。則無山而成山矣。大中見小者。散漫處植易長之竹。編易茂之梅以屏之。小中見大者。窄院之牆。宜凹凸其形。飾以綠色。引以藤蔓。嵌大石。鑿字作碑記形。推窗如臨石壁。便覺峻峭無窮」。

(78) 李格非『洛陽名園記』環谿「環谿。(中略)。華亭者南臨池。池左右翼。而北過涼榭。復匯爲大池。(中略)。榭南有多景樓。以南望。則嵩高少室、龍門大谷。層峯翠巖。畢効奇于前。榭北有風月臺。以北望。則隋唐宮闕樓殿。千門萬戶。岩巖靡靡。延亘十餘里。凡左太冲十餘年極力而賦者。可瞥目而盡也。(後略)」。

(79) 計成『園治』卷三・借景「夫借景、林園之最要者也。如遠借、隣借、仰借、俯借。應時而借」。

(80) 計成『園治』卷三・接山「峭壁者。靠壁理也。藉以粉壁爲紙。以石爲繪也。理者相石皺紋。做古人筆意。植黃山松柏、古梅、美竹。收之圓窗。宛然鏡遊也」。

(81) 李漁『閒情偶寄』卷九・居室部・牕欄第二「取景在借。開牕莫妙于借景。(中略)。四面皆實。獨虛其中。而爲便面之形。實者用板。蒙以灰布。勿露一隙之光。虛者用木作匡。上下皆曲。而直其兩旁。所謂便面景也。(中略)。坐于其中。則兩岸之湖光山色。寺觀浮屠。雲烟竹樹。以及往來之樵人牧豎。醉翁遊女。連人帶馬。盡入便面之中。作我天然



圖畫。(中略)。是山也。而可以作畫。是畫也。而可以爲牕。不過損予一日杖頭錢。爲裝之具耳。遂命童子。裁紙數幅。以爲畫之頭尾及左右鑲邊。頭尾貼于牕之上下。鑲邊貼于兩傍。儼然堂畫一幅。而但虛其中。非虛其中。欲以屋後之山代之也。坐而觀之。則牕非牕也。畫也。山非屋後之山。卽畫上之山也」。

(82) 曹雪芹『紅樓夢』第一七回「剛至園門。(中略)。遂命開門進去。只見

一帶翠嶂擋在面前。衆清客都道。好山、好山。賈政道。非此一山。一進來園中。所有之景。悉入目中。更有何趣。(後略)」。

(83) 文震亨『長物志』卷一·室廬·海論「凡入門處。必小委曲。忌太直」。

(84) 計成『園冶』卷一·相地·城市地「如園之。必向幽偏可築。隣離近俗。門掩無諱。開徑逶迤」。

(85) 白居易「草堂記」「下鋪白石。爲出入道」。

(86) 李格非『洛陽名園記』「天王院花園子」洛中花甚多種。而獨名牡丹曰花王。凡園皆植牡丹。而獨名此曰花園子。蓋無他池亭。獨有牡丹數十萬本」。

插圖出典目錄

(1)(2)(4)(5)(6)(7)(9)(10)(12)(14a) 著者攝影

(3) 平泉鄉土館·荒木伸介氏提供

(8) 『景定建康志』卷二四

(11)(14b) 劉敦楨著·田中淡譯『中國の名庭——蘇州古典園林』圖一一〇、

一一一、小學館、一九八二